
水の花たゆたい

水沢ナルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の花たゆたい

【Nコード】

N6835U

【作者名】

水沢ナルミ

【あらすじ】

超能力者の存在が公になった、現代のようで現代でない世界。超能力者 玄英を名乗る異能の者らは、疎まれ厭われ崇められ、歴史の陰に生きてきた。とある超能力者の武門に生まれた主人公は、その力を巡る争いに巻き込まれていく。なんちゃって超能力学園ファンタジー（ちょっとだけシリアス）

設定資料集（前書き）

本編の進行に合わせて随時更新予定です。

本編で説明されている（する予定）なので、ここを読まなくても問題はありません。ちょっと設定を忘れた時などにご利用ください。

設定資料集

【玄英】

稀人、マレビト、客神、変革者。大和古来の異能者の集団、あるいは個人を指してこう呼ぶ。玄英たちは古来より崇拜、あるいは蔑視の対象であったが、「玄英」という言葉自体には宗教的あるいは差別的な意味合いは含まれていない、尊称である。

現代においては、彼らの存在は公に認められており、多くの機関でその能力の研究が進んでいる。その事実は多くの利益と、それを上回る諸問題をもたらしている。

【玄英紛争】

変革戦争とも言う。玄英の存在を世に知らしめることになった直接の原因。

【約誓の領】

有力な玄英の名家旧家で構成される統括機関。十一家の当主たちで構成され、全国の玄英たちを監督する。澄水家は酋帥格第一席、序列は六番目である。

【澄水家】

渥美村を治める玄英の一族。多くは水を操る異能に目覚める。玄英十一家『約誓の領』の中でも随一の火力を誇る、と言われている。当主は代々、玄英の枠を超えた二つの絶技のうち一つを修得する。

【十花不語仙】

渥美村の有力者たち。

澄水、汀、佐志、垂氷、浦辺、氷室、瀬田、秋津、泉水、温海の十

家で構成される。

【水衞み】

渥美村に住む水の玄英達が共有している、水気操作術の基本概念。これが強く、広いほど、玄英としては優秀といえる。澄水湧祥の水衞みは「強く狭い」性質が顕著である。

【細水】

サザレミズ。澄水派の剣士が得意とする、水剣形成術、およびその剣の名。多くの者が修得していることもあり、盛んに研究されている玄英技能の一つ。

【神機】

「玄英の御業を一般人にも揮えるように」という思想で設計された超常現象再現のための補助機器。RESPAD、単にデバイスともいう。既に流通しているタイプも存在するが、諸々の理由で実用化には程遠い。

登場人物紹介（前書き）

こちらにも本編の進行にあわせて随時更新予定です。

登場人物紹介

【主人公】

スズズ ユウシヨウ

澄水 湧祥

渥美村を治める澄水家の跡目。

水を支配する玄英。属性は『血』または『騎兵』

【第一章主要登場人物】

ハヤセ タクマ

早瀬 拓馬

某都市の高校に通う17歳。勘が鋭く、咄嗟の判断力にちょっとだけ優れる一般人。

ウチコシ マイ

打越 麻衣

拓馬の幼馴染。明朗快活ポニーテール。

周囲に元気と活力を与える類のムードメーカー。だが最近元気が無いように。

ミギワ ウララ

汀 麗

拓馬の前に突如として現れた小柄な少女。生意気。

とある名家の一人娘。癖っ毛猫目のひねくれ者だが……

水気を操る玄英。その属性は『霧』。

アツミ カイ

温海 權

温海家当主。湧祥の幼馴染。

ミギワ セイイチロウ

汀 清一郎

麗の父で、渥美村を行政面で支える実力者。村を統括する幹部会、十花不語仙の一人。湧祥の後見人でもある。

ミズモリ トウコ

水守 透子

渥美村の巫女。

サシ タケル

佐志 威

渥美村の有力者。だがチンピラ。属性は『汽』そして『渦』。

スンズ レンシヨウ

澄水 漣生

渥美村の統治者。湧祥の父。

物語開始時点の十花不語仙

澄水湧祥、汀清一郎、氷室正剛、垂氷瑞名、浦辺一成、佐志威
温海權、瀬田麓杜、????、????

第一話 血吸いの鬼・一

第一章 『水の花たゆたい、氷の蜘蛛は空に哭く』

最初は、本当にただの好奇心にすぎなかったのだ。震えの止まらない両足を必死に抑えつけながら、早瀬拓馬は声なき声で喘いだ。

最初はそう、実にありふれた話。高校の同級生、友人の兄が最近中古車を購入した。どこでもいいから連れて行ってくれるってよ。友人の提案に好奇心旺盛な拓馬以下数名の男子は、無視できるはずもなく。海岸線を走り、他県の山を巡り、房総半島を一周し……拓馬たちは普段では叶わない遊びに歓喜していた。

だが人間というものは、どんな甘美な刺激にもやがて飽きてしまうものである。ただ車で遠出するだけの“遊び”にも倦怠感が漂いだした頃、友人の一人が刺激を求めて新たな遊びを思い付く。

肝試しである。曰く、とある山奥に存在する小さな滝に“出る”のだという。そこには非業の死を遂げた女の霊が、今も成仏できずに留まっており、近づく男を滝壺へ引きずり込むのだと。そのほか、滝へ通ずるトンネルには生前滝の女に惚れていた男の怨念が、やはり近づく者を殺す。実際に行方不明者も幾人が云々。

友人の胡散臭い怪談話を聞いた者の多くが「嘘くさい」「怖くも何ともない」などと感想を抱いたはずだったが、そこは「怖気づいていると思われたくない」という思春期特有のプライドの高さが成せる業か、見境なく刺激を求めたためか、結果的には肝試しは実行に移された。

思えば、これが間違いの始まりだった。

海岸線の一般道を通り目的の山の近くまで数時間、そこから山道に入ってさらに数時間。既に日は暮れかけて、木々生い茂る山中は既にほの暗い。それでも予定よりも早い到着であった。

ナビを最新の情報に更新しておいたお陰である。友人の持っていた前時代の地図のデータには記されていない道が何本も存在した。

そうして一行は滝へと通ずるトンネルがあるという場所へやって来たのだが。

「どづいつづったよ、コレ？」

トンネルなど、存在しなかった。正しく言うなら、トンネルが無くなっていったのだ。トンネルがあるはずの道は最近掘り返されたよな、真新しい色の土砂に埋もれていた。軽量型の懐中電灯の光を当ててみると、土からは、所々コンクリート片がのぞいている。

その土に草が茂っているのを見るに、崩れたのは最近ではあっても数日前、といったレベルでは無いようだ。

心霊スポットが土砂崩れで埋まってしまった。事象としては、それだけ。だが拓馬は、ただそれだけのコトに言い様の無い不安を感じた。

仕方ない、引き返そう

誰かがそう口にするのを待っていた拓

馬。しかし、この程度ではつまらないと感じたのか、友人の兄が「トンネルを歩いて越えて滝へ行こう」と提案してきた。

このまま、おめおめと帰れない　という気持ちは皆同じだったのだろう。幸い天気は快晴、食料も十分、ナビもある、ということ、友人の兄の提案に異を唱える者はいなかった。拓馬も、喜び勇んで山に入っていく友人達を引き留めるだけの確信を持っていなかった。自らの不安に対する確信を。

それは暗い山中で遭難する危険だとか、獣に襲われるだとか、そういったものとは別次元の危険信号であったのだが、拓馬にはそれを口にする言葉を持ちえなかった。そもそも、唯一車を運転できる友人の兄が乗り気なのだ。結局、拓馬も皆についていくよりなかった。

そしてこれが彼等の運命を決定づけた。意気揚々と森に入っていく若者たち。それを草陰から見つめる“鬼”の存在に、彼らは気付かない。

山中に入って一時間と数十分、ようやく小丘を越えてトンネルの向こう側が見えてきた。既に辺りは闇一色で、時折響く音は獣の遠吠えのみとなった。懐中電灯で足元を照らしつつ、携帯型のナビで来た道を慎重に記録していった結果、想像以上に時間がかかってしまったのだ。

だが、後は下り道である。大変な思いをした分だけ、山とも呼べぬ丘陵とはいえ、峠を越えた時の喜びは大きいものである。息を切らしつつ先頭を歩いていた友人の兄は興奮を隠しきれぬ面持ちで振り返り、一行に丘を越えたことを伝えようとするが……

それは終ぞ叶わなかった。

ひゅ、と何かが風を切る音を、拓馬は聞いた。続いて、ごとりと重量のある何かが落ちる音。次いで、生温かい液体が全身を濡らした。

「うわっ」

驚いた拓馬は咄嗟に足元に向けていたライトを前方に向ける。驚いたのは後ろの友人も同様だったようで、複数の明りが先頭の兄に向けられる。照らし出されたソレを見た瞬間、拓馬たちの思考回路は停止した。

ソレは最早、友人の兄などではなかった。首から上、本来なら当然あるべきものがソコには無く、そこからは際限なく噴き出すどす黒い液体、そして足元に転がりこんできたのは……

真っ先に悲鳴を上げたのは、拓馬の二つ後ろを歩いていた友人だった。取り乱し、口が裂けんばかりの勢いで叫び、懐中電灯を無闇矢鱈に振り回す。他の友人たちを押しつけて、もと来た道を逃げようとするが、次の瞬間には少年の胴と足は別れを告げていた。

木々の香りを一瞬で塗り潰す、生臭い血臭が充満する。同時に生温かい鮮血が少年たちの総身に降り注ぐ。初夏の水気とともに纏わりつく血糊は、狩人からの祝福のように拓馬には思えた。逃がさない、必ず殺す、その血に塗れた者全て、一人残らず喰らって殺す。そんな声を、確かに聞いた。

爆発する悲鳴。少年たちは来た道に戻るなどという至極真つ当な

思考など遙か彼方へ投げ捨て、散り散りになって逃げ出す。拓馬は、動けない。他の少年たちのように眼前で起きた惨劇に恐怖したからではない。突如として周囲に張り巡らされた殺気、その凄まじさに身体が動くことを拒否したのだ。幸か不幸か拓馬は友人たちに比べ、その手の感覚が鋭敏であった。

その鋭さが、ここでは吉と出る。

散り散りになって逃げ出した少年たちが急に動きを止めた。否、止められた。ある者は足をとられて転び、またある者は全身で何かに激突かのように宙に踊る。彼らの動きを封じたモノの正体は、すぐにわかった。

懐中電灯のほのかな明りで微かに見えたそれは、蜘蛛の巣。木々を伝い無数に張り巡らされた糸であった。それらの糸は獲物である少年たちに触れると、まるで意思ある生物のような挙動で蠢き巻きつく。

絡めとられた少年たちは何事か叫び暴れるが、身を縛る糸はいかなる理屈でか、解くことも引きちぎることも叶わない。

そして、糸に捕まった獲物を“喰う”ために、理外の蜘蛛が姿を現す。

草木生い茂る山中に音もなく現れたそれは、人の姿をしていた。だが拓馬にとってソレは、それが自分と同じ人間のものとは思えないほどの異様であった。身の丈は少年たちより一回り大きく、腰近くまで伸びた黒の長髪は風になびいて広がっている。血を浴びてな

お黒い紺の装束は、まるで時代劇に出てくる浪人のそれ。左手に持つは日本刀。落ち延びた武士の怨霊　拓馬の脳裏にそんな言葉が浮かぶ。

その男は蜘蛛の糸に絡まった少年の一人の前に立ち、何事か囁く。それを聞いた少年は俄かに泣き叫び暴れ狂う。「違う」「そんなことない」「助けて」と少年は必死に叫ぶが、しかし、それでも糸は解けない。

化物が手にした刃がちやり、と鳴る。その瞬間はすぐにやってきた。横一闪、力を込めるわけでもなく振るわれた一刀。しかし、その緩慢な動作で、少年の躰は真つ二つとなる。飛び散る鮮血。その光景を拓馬は茫然と見ることしかできなかつた。

さらに拓馬は驚愕の光景を目にする。友を斬つたその男は、疎うことなく嘔き出す血を浴び、あるうことかソレを大口開けて飲みだしたのだ。喜悦に染まった、鬼の形相で。

このままでは死ぬ　停止していた拓馬の思考がよみがえる。拓馬は踵を返し、糸をかいくり斜面を駆け降りる。逃げ出す際にも糸に捕まった少年たちの断末魔を幾度も聞いたが、拓馬は振り返らない。ただひたすらに、一心不乱に駆け降りていった。

一気に駆け降りた斜面の底で、拓馬は一息ついた。小さな声で自分を呼ぶ声に振り向くと、友人の一人　雄太が手招きしているのが見えた。あの怨霊の糸から逃れられたようだ。ここへきて拓馬は

少し安堵する。

友人の兄を皮切りに、丘の頂上で惨劇を演じた時代錯誤の武士の亡霊。あの時周囲を包んだ殺気は、今は無い。見逃してくれたということだろうか。それとも獲物を喰い飽きたのだろうか。ともあれ追ってくる気配は無い。そう考えた瞬間、全身から力が抜けた拓馬はその場に座り込んだ。大丈夫か、と小声でたずねる雄太に手で応えて、拓馬は亡霊の正体を考え始める。

「なあ拓馬、アレ一体なんなんだよ」

あの化物の正体が気になっていたのは雄太も同じなようで、拓馬と同様の疑問を口にする。

「わかんねえよ。けどあの蜘蛛の巣みたいなの、見たる？」

「ああ」

雄太もあの光景を目撃して、それを思い出したのか、全身を震わせながら答える。

逃げ惑う仲間を捕え、雁字搦めにしたあの無数の糸。触ればたちまち全身に絡みつく糸など、“常識的に”ありえない。だとするならば。

「もしかしたら、“マレビト”……かもな」

マレビト 稀人、客神。近年その存在が明らかになった、超自然的な力を揮う異能の者。宙を舞い、炎を灯し、病を癒し、風を凧ぐ。そんな魔法ともいえる所業を指の先一本でやってのける超能力

者たち。あの不可思議な糸も、マレビトの力であるならば、理解はできずとも納得はできる。しかし……

「嘘だろ。稀人はみんな管理されてるはずじゃなかったのかよ？ あんな人殺しの野良がいるなんて信じらんねえ」

雄太の疑問はもつともであった。稀人の存在が確認されてから早六十余年、「国家による特殊能力者たちの保護および管理」によって 反発した者、恭順した者の区別なく 稀人たちは全て国家の管理下におかれ、しかるべき施設、区画で生活を送っているはずなのだ。

「あんな化物が野放しなんて冗談じゃねえよ」

「俺だつて信じたくないよ。けどそんなコト言つたつて仕様がないだろ。あんな馬鹿げた力、他にどう説明……ッ!？」

「どっし」

「シッ!」

突然会話を止めた拓馬を訝かしんだ雄太だが、続く言葉を拓馬の手によって遮られる。

足音。丘の上から此方に向かっている。おそらく足音の主だろう、時折助けを呼んでいる。それは二人に聞き覚えのある声で。

「ヒロの声だ」

「待てって」

ヒロ 同級生の声に飛び出そうとする雄太を拓馬は押し止める。
「なんで止める」と批難の目を向ける雄太に拓馬は小声で答える。

「足音が、もう一つ聞こえる」

拓馬の言葉に、雄太が喉を鳴らして凍りついた。耳を澄ませる。
意識を聴覚に集中させようと思えば思うほど、自分の心音が煩く
感じる。

痛いほど拍動する胸を抑えつけ、はたして聞こえてきたのは異様に静かな足音。

とても斜面を駆け下りているとは思えない、しかしそれでいて速い、地を滑るかのような柔らかな音。その主は、最早考えるまでもない。拓馬の総身が凍りつく。

第一話 血吸いの鬼・一（後書き）

はじめまして、水沢ナルミと申します。ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

こういった投稿サイトに拙作を載せるのは、ほんとんど初めてで緊張しておりますが長く続けていけたらいいなと思っていますので、よろしく願います。

第二話 血吸いの鬼・二

雄太と共に草陰に隠れた拓馬の目に飛び込んできたのは 何事か喚きながら逃げ惑うヒロ、そしてヒロを追ってきたであろう、あの鬼の姿。一切の明りを断った夜の森は暗く、月明かりがわずかに人や木々の輪郭を映し出す程度である。だが、そんな暗がりでも怨霊めいた蜘蛛の鬼は圧倒的な存在感を放っていた。

紺の装束に黒の袴、宵闇の中にあつては黒づくめの和装にしか見えない。乱れた黒い髪は風に揺れ、その時代錯誤な装いと相まって、おどろおどろしい、幽鬼の如き威容を演出していた。その表情は、拓馬たちが隠れている場所からは見えない。

蜘蛛の人斬りはゆらり、と緩やかな動作で抜き身の刀を振る。次の瞬間、刀が消えた。響く呻き声 見ると逃げたはずのヒロが宙に浮いてもがいている。まるで、見えない糸によって吊り上げられているかのように。それを見て拓馬は確信した。先程仲間を絡めとつたのも、今まさにヒロを吊り上げているのも同じもの。鬼が使っているのは、刀身が変じた無数の糸であると。

拓馬は友人が語った怪談を思い出す。小さな滝にはかつて非業の死を遂げた女の霊が眠っていて、近づく男を引きずりこむ 蜘蛛の化身となり、その吐き出す糸で。

蜘蛛の巣に絡めとられたヒロはもがくが、やはり糸はびくともしない。刀身が変じて糸に成つたのだとしたら、その糸は鋼 断ち切るのには容易ではないはずだ。ヒロは最早、鬼蜘蛛に斬り殺されるのを待つしかない。

「た、助けねえと。ヒロが、ヒロが死んじゃう」

カタカタと歯を鳴らしながらも雄太は言う。拓馬は無言。だがそこには明らかな否定の意味が混じっている。雄太も分かっているはずだ。あの怪物がマレビトであるうとなかろうと、自分たちの手に負える相手ではないと。拓馬は無言で雄太の肩を押さえつける。もう諦めると、言葉を指先にこめて雄太を押しとどめる。「だけど」と雄太の目が語った瞬間、蛙の鳴き声のような音が、夜の森に響いた。

無論それは蛙の鳴き声などではない。

視線を移すと、釣り上げられたヒロの身体は、ありえない方向に捻じれ曲がり、力なく逆さ吊りにされていた。雄太は口を開けたまま、ひゅつと息を呑んだ。

ヒロはもの言わぬマリオネットと化し、辺りには痛いほどの静寂が訪れる。拓馬は両膝を抱え全身の震えを鎮めようとする。この沈黙から察するに、仲間は全滅だろう。ならば鬼の次の標的は自然、拓馬と雄太。このまま息を潜めて鬼をやりすごせばよし、見つからば……

拓馬は心臓が加速度的に鼓動を速めていくのを感じた。この鼓動すら鬼には聞こえてしまうのではと恐怖する。震えが止まらない。吐き気がこみ上げる。それでも拓馬は沈黙を守った。そして、どれほど時間が経ったか、拓馬には比喻ではなく永遠に続くのではと思わせた時が過ぎ。

鬼は納刀し、あさっての方向へと歩み去ってゆく。助かった。拓馬の気が緩んだ刹那、隣の雄太が急に呻きだす。拓馬は驚き、雄太

の口を塞ぐ。しかしなおも、雄太の異常は治まらない。「ぐひい」と人とは思えぬ声をあげて悶え苦しむ雄太。遂には頭を抱え、草陰から飛び出し暴れ出した。

もう終わった、と拓馬は絶望する。これでだけ声を上げて、あの鬼蜘蛛が気付かぬわけがない。今度こそ見つかって、仲間たちのように斬り刻まれるのだ。

拓馬は目を閉じる。脳裏に家族の顔が浮かぶ。父、母、姉……皆、自分の死を悼んでくれるだろうか。遠く山の向こうに居る家族に、心中で詫びを入れた拓馬は、瞼を開くと信じられない光景を目にした。

悶え苦しんでいた雄太は、既に人のカタチを成していなかった。

全身が膨れ上がり、まるで巨大な風船のよう。頭蓋でさえも倍近い大きさに膨張していた。もはや生きているとは思えない。それでも雄太は苦悶の雄叫びをあげて暴れまわる。拓馬は言葉も、思考も全て忘却して雄太の姿を目に焼き付けた。そして、恐慌に染まった雄太の瞳と、視線が交わる。雄太の口が何か伝えようとした、その時。

雄太の身体が爆ぜる。ぶち撒けられた諸々は舞い上がり、文字通り、晴れた月夜に血の雨を降らす。

雄太の散華を呆然と見送る雄太の目に、いつからそこにいたのか、鬼の姿が飛び込んでくる。初めて真正面から鬼の姿を見た拓馬。月明かりに照らされたその貌は、嗤っていた。侮蔑か憐憫か悲哀か、あるいはその全てか。負の感情をその相貌に詰め込んで、鬼は嗤っていた。

ああ、と拓馬は得心する。初めから、この鬼は気付いていたのだ。自分たち二人が草陰に潜んでいることを。知って、自らの拳動に一喜一憂し恐怖する自分たちを弄んだのだと。降り注ぐ雄太の一部を浴びながら拓馬は思う。それを最後に、拓馬の思考は闇へと落ちていった。

拓馬が目覚めたのは、市民病院の一室であった。全身の虚脱感のせいで現実味を感じられない。だが目を覚ました瞬間、姉に手を握られ呼びかけられたのだけは、確と感じられた。手を握り返すことで応えると、姉は涙ながらに拓馬に抱きついてきた。

姉はひとしきり泣いた後、医師と看護師と家族を連れてきた。何か喋らなければと思いつつも、かけるべき言葉が浮かばなかった拓馬は、初めて見る泣き顔の両親に向かって「ごめん」と告げて目を閉じた。

数日後、精神的に多少落ち着いたということで、警察が拓馬のもとを訪れ、事情聴取を行った。そこで拓馬は自分が意識を失って後の事の顛末を知る。

あの後、予定の時間を過ぎても帰宅しない拓馬たちを心配した家族が警察に届け出、行き先を伝えてあったこともあって拓馬を発見するのは容易だったという。同時に、捜索に当たった警察官は信じられない光景を目の当たりにしたようだ。

男子高校生、大学生あわせて七名の遺体が発見された。多くが鋭利な刃物による殺傷。この猟奇事件は当然ながら全国的に注目され、瞬く間に国民の知るところとなった。おかげで拓馬は、ほとぼりが冷めるまでの間の病院生活を余儀なくされた。

しかし、この事件がマレビト 通称玄英けんえいによる犯行の可能性が高いと拓馬が証言したことは一切、公にされることはなかった。

第三話 水鬼来訪・一

忌わしい事件から二週間、拓馬をとりまく環境は驚くほど変化の無いものであった。事件直後はその残酷性もあって大きく報道され、被害に遭った少年たちの関係者は否応ない哀悼と好奇の視線を浴びることとなったが、唯一の生存者である拓馬への配慮なのか、あるいは別の力が働いたか、周囲は拓馬の想像以上におとなしいものだった。

無論、拓馬にとってそれは幸いなことであつた。が、学業に復帰する段になって、拓馬は自らが事件の当事者であるという事実に向き合う必要性に迫られる。

久々に教室にやってきた拓馬を見て、級友たちはおずおずと、遠慮がちに話しかけてきた。その中には、会話も碌に交わしたことの無い者もいた。「大丈夫だったか」「怪我はない?」「あんま無理すんなよ」 事前にどうやって声を掛けるか決めてたんだな、と拓馬は自分でも驚くほど冷静に分析する一方で。

「ごめん、みんな。ありがとう」

拓馬は申し訳ない気持ちを抱いていた。あの日、怪談流れる暗い山中に入ろうなどと考えなければ、弱虫と笑われようと、自分が止めるべきではなかったのか、自業自得ではないのか 考えれば考えるほど、自責の念に囚われる。事件の唯一の生存者であるという事実が、自分でも気付かないほど、拓馬に重く押し掛かっていた。止め処ない負の思考の連鎖に陥ろうとしたとき……

「本当、悪運だけは強いんだから。よく生きて帰ってきたわね」

「麻衣」

声を掛けてきたのは、拓馬の幼馴染で同級生の打越麻衣。拓馬が目覚めて、家族以外では一番はじめに再会した友人だ。明朗闊達な性格で、目標を決めたら脇目もふらずに突っ込んでいく猪突猛進娘。幼稚園の頃から、拓馬とはかれこれ十年の付き合いになる。その麻衣が、長いポニーテールを揺らし、親指をぐいと立てて上を指し示す。そして一言、

「屋上」

「は？」

「どうせ復帰初日なんて暇なんでしょ。ちょっと話そ」

「どういう理屈だよ」と反論しても麻衣は聞かず、拓馬の手を掴んで引つ張っていく。「またあの二人か」と冷やかしの声に赤面しつつも、周囲のクラスメートが少しだけ以前の調子に戻ってくれたことに嬉しく思う。そのせいか、拓馬は思いの外強く握ってくる麻衣の手を解けずにいた。

拓馬は自分の学校の屋上が好きだった。嫌なことがあった、試験で赤点をとった、部活でいいタイムがなかなか出せない。そんな時、拓馬は決まって屋上に来て、空を見上げる。そうして気分を落ち着かせる、自然と事は上手く運べるものだ。そして拓馬を捜しに来た麻衣に連れ戻されて……それが拓馬のジンクスであり、日常であった。

だが今日は違う。拓馬は初めて、屋上に連れてこられたのだ。い

つもは連れ戻す役割である麻衣に。今日の麻衣には、有無をいわさぬ威圧感　というより必死さがあつた。その理由は、拓馬には判らなかつたが。

屋上のドアを閉めるやいなや、麻衣は拓馬に問いを投げる。

「アンタ、ちゃんと警察に話したの？」

「なんのことだよ」

「犯人よ。アンタ見たんでしょ。雄太たちを斬つた犯人」

言われて、拓馬はあの忌まわしい夜の出来事を想起する。友人たちをその手にかけて殺人者。首を斬り、胴を断ち、血を啜つた鬼の所業を。思い出すだけで怖気が走る。あれは、人間のソレではなかつた。

「猿でも分かるわよ。ひ弱でもない男子高校が何人もいて、山の中だつたとはいっても、アンタしか生き残れないなんて、どこのホラ―映画よ。ただの人間に、できる芸当じゃない」

「それは、ちゃんと伝えたよ。犯人はマレビト、玄英なんじゃないかって」

拓馬は目撃しているのだ。惨殺者が不可思議な糸を繰つて友人らを捕え斬り捨てたことは。それは拓馬も、余さず警察の事情聴取で話したことだつた。

「じゃあなんで世間には公表されてないのよ？　玄英の仕業だとしてたら大問題なのに……いや、もうみんな薄々気付いてる」

「俺達の知らない、管理されてない玄英がいるって？」

「そう。なのに何故、公表を控えているのかなって」

「そりゃあ……」

思いつく理由など、一つしかない。国家の体面の問題だ。

六十年前、一人の超能力者が殺人を犯した。無論、事件発生直後はそれが超常の力による犯行であるなど誰も言わなかったし、指摘されても信じなかったろう。だが事件現場の防犯カメラに映った映像を解析すると、状況は一変する。

そこに映っていたのは、細腕の女が大の男を触れることなく吹き飛ばしている衝撃的な光景だった。

その映像から被疑者は容易に割り出され、事件発生から二週間とたたずに解決する。逮捕された女性は容疑を認め、事件の焦点は「異能により行われた犯罪を世間に公表するか否か」という点に移された。この時点で、当時の内閣府には超能力者により引き起こされた事件の報告を受けた者は相当数存在していた。さらに一般人にも多少なりとも知られている可能性もあり緘口令を布く段階を大きく越えてしまっていた。時の首脳陣はこの対応に苦慮していたが、この事案は彼らにとっては最悪の、思わぬ形で決着を見ることになる。

事件発生から三ヶ月後、「玄英」を名乗る超能力者からの声明が、内閣府に寄せられた。

声明文には、永きにわたり虐げられてきた異能者たちの怨念が綴られていた。

玄英曰く、我々は遙か昔からこの国に存在しており、時の権力者たちに利用され、時には虐げられ日陰に送られていた。求めるは待遇の改善。一つ、玄英の存在と歴史を世間に嘘偽りなく公表し、その存在の是非を国民に問うこと。一つ、国家により秘密裏に行われていた玄英監視体制の即刻解除、国民と同等の権利を保障すること。一つ、殺人容疑で逮捕された同胞の釈放を……

結果だけ言えば、交渉は決裂、“客神派”を名乗る異能者、玄英たちが全国で一斉蜂起。日本は大戦以来の暴力の渦に巻き込まれることになる。玄英紛争の始まりである。

日本史、現代日本の項、ページ数にしてたったの二枚だが、諸外国の干渉、新興勢力によるテロリズム、そして“客神派”首領の死亡、幾度となく繰り返される内閣解散、政情不安……紆余曲折を経、国と玄英は和解に至る。それが十年前。「国家が玄英の能力を安全にかつ平和的に運用できるよう、玄英の権利を保障し、その生命を保護する」、「玄英は自らの能力の平和利用のために、その研究に保障された権利の範囲内で協力すること」……簡単にいつてしまえば、それだけのこと。

その取り決めのもと、玄英を見つけ出し、そして真つ当な社会的生活を送れるよう「教育」する機関。有り体にいえば玄英の学校が設立された。現在、教育機関は全国に八つ。いま、国民は玄英であるか否か、正確にいえば玄英たり得る素質を持っているか否か、検査を受ける義務を負っている。それによって「玄英の能力の平和的利用」……その一つである、一般市民の安全が保障されているはずなのだ。だというのに。

「野放しの玄英がいるなんて、信じられねえよ。国もそりゃ隠そうとするわな」

同じ台詞を雄太も口にしてたことを思い出して、拓馬の胸は痛む。

「そう……だね」

麻衣の言葉も歯切れが悪い。十数秒の沈黙の後、麻衣が口を開く。

「あのさ拓馬、玄英のこと、やっぱり恨んでる？」

「何でそんなこと」

「いいから」

麻衣のただならぬ気配に圧されて、拓馬は考える。恨む、今の今まで考えが及ばなかったのが不思議だった。友人たちを弄び、ゴミのように斬り捨てた鬼。そのあまりの非現実感に、ソレが憎むべき対象であることが慮外の発想であった。家族を水難で亡くしても、川を恨む者がいないように、拓馬は心のどこかであの鬼を天災の類だと思っようにしていたのかもしれない。

「そうだよな。あいつは、怨霊なんかじゃないもんな」

玄英の能力を間近で見たのが初めてだったからかもしれない。教科書で習った玄英の能力は、まさに魔法のような力。だが、人殺しの易々で行える能力だと拓馬は考えていなかった。事実、玄英紛争において玄英のテロリストたちが使用した主兵装は人間の武器だったからだ。

「そうだな。雄太たちが殺られて、悔しいし、あいつを許せねえ」

「そっか……うん、そっだよね」

おかしい。そこではじめて拓馬は麻衣の態度を不審に思った。屋上に来てからというものの、いつもの明るい麻衣は鳴りを潜め、常に暗い面持ちである。はじめは友人たちが惨殺されたのだから当然と思っていたのだが、どうも様子がおかしい。

「麻衣、お前……ん？」

「わぁ」

拓馬は麻衣に「何かあったのか」と声を掛けようとして、しかしそれは、突然の雨に遮られた。梅雨は明けたというのに、天をひっくり返したような雨が降り注ぐ。

「とっ、とりあえず戻ろっ」

「そっだな」

麻衣に同意し校舎に入るドアに向かおうとした拓馬は、異変に気付く。

それは、あの夜、山に入ろうとした瞬間に感じた悪寒。
全身を撫でられるかのような
拓馬の顔から血の気が引く。

「麻衣！ はやく校舎の中に！」

「もう、急に大声ださなくっても、聞こえてるって……」

『へえ、あなた、意外と勘がいいのね』

突如、声が天から降ってきた。吃驚し見上げたその先で、拓馬は再び信じられぬ光景を見た。

校舎に入る扉の左斜め上方　給水塔の影に、一体いつからソコにいたのか、一人の少女が立っていた。方々に伸びた黒の癖っ毛の長髪、切れ長の目、白のスカートから覗く脚は細く、見た目だけならば普通の華奢な女子だ。

しかし、異様なのは其処ではない。轟々と降る俄か雨の中、彼女は一切濡れていないのだ。理由は、目の前に示してある。彼女に向かって降る雨は、彼女の頭上で重力を無視するかのように留まり、“水の傘”を成している。

玄英　拓馬は言われずとも納得する。水を曲げ、火を灯し、岩を砕き、雷を生む。遠い過去から大和の闇に生きてきた超能力者。拓馬たちを見下ろす様は、清々しい程に傲岸不遜。水の精などという、生易しい表現では隠しきれない驕慢の気配を漂わせていた。

「初めまして早瀬拓馬。私は汀麗」

雨に濡れる此方の事情など一切関知していないかのように、麗と名乗った小柄な少女は言葉を紡ぐ。

拓馬は己の胸の内に諦観にも似た感情が渦巻くのを感じた。もう自分分は「あの夜」からは逃げられないのだと。

そして、非日常よりの使者は告げる。

「私達の当主があなたに会いたがっているの。突然で悪いけど、
緒に来てもらおうわ」

第四話 水鬼来訪・二

突然の雨とともに訪れた少女。白のスカートに紺のシャツ。いたって普通の出で立ちである。あの鬼は玄英と呼んでも違和感の無い、浮世離れた空気を纏っていたが、この少女は違う。雨を避ける“雨の傘”が無ければ、ただの人間と区別はつかないだろう。

「驚いた？ だとすればアナタ、危機感足りないわね。玄英に殺されかけた身で、のうのうと今までの暮らしができると思つたら、大間違いね。あなたは玄英の力の一端を知ってしまった。法令上、玄英と一般人は明確に区別されなければならず、相互干渉は制限される。あなたは法外の存在になったことを自覚すべきよ。同情はするけど、こつちも二週間待つたんだから、さつさと付いてきてくれる？」

有無を言わさぬ少女の威圧に、拓馬は無意識に唾を飲み込む。力を隠さず拓馬の前に現れたということは、少女の「事情」というのは十中八九あの夜の、あの鬼のことだろう。幸いなことに、眼前の少女は威圧を放てど殺意は微塵も懷いていない（はずだ）。「時間が惜しい」と言っているが、十分に話を通じる相手であると判断した拓馬は、少考して口を開く。

「質問が二つあるんだが、いいか？」

拓馬の問いに、麗と名乗った少女は苦笑する。

「どうぞ。さすがに、それくらいは待ってあげる。こちらの都合で連れまわすのだものね」

「ちよつとあなた。いきなり現れて何を……！」

状況の飲み込めず眼前の少女に怒りをぶつける麻衣に拓馬は「大丈夫だから」と落ち着かせる。

「じゃあ一つ目、あんた、二週間前の犯人は知らないのか」

「Yes・話が早くて助かるわ。だから、あなたの持っている情報がほしいの」

「二つ目、今すぐでないといけないのか？」

「Yes・私達の一族の十花……ああ、長老会みたいなものだけど、そこが痺れを切らしていてね、一刻もはやくつて五月蠅いから。ああ年功序列が憎いわ」。

それと、ご家族には既に伝えてあるから、心配しないで。まあ納得はされなかつたけど」

麗はぶつきらぼくに、鬱陶しそうに言う。どうやら麗本人は今回このような仕儀に至ったことに納得はしていないようだ。

「無駄話はここまで。一緒に来てもらおうわよ」

言つて麗は軽い身のこなしで給水塔の傍から飛んで屋上に、拓馬の目の前に降り立つ。まるで重みを感じさせない着地音に、年不相応の武の習熟を覗わせた。麗が手を差し出す。今まで傲岸不遜な態度を崩さなかつた麗の表情が、初めて切実な願いの色を帯びる。

「行きましょう 家族や級友たちとは、今生の別れではないのだから深刻に考える必要はない。我等の里にいる限り、あなたの命は守ります……汀家の名に懸けてね」

「わかった」

汀の家名がどれほど重いものかなど、拓馬に知る由もなかったが、納得するよりない。相手は玄英。一対一ではただの人間である拓馬は圧倒的に不利なのだから。はじめから、拒否という選択肢は無いのだ。

「拓馬、待って！」

「麻衣、悪いな。話の続きは俺が戻ってから……」

そこでふと、拓馬は疑問に思う。麗は拓馬の存在を「法外」と言った。そう言うからには彼女（あるいは彼女の属する組織）は国家権力とは切り離された存在で、秘密裏に動いているのではないのか。事情を十分に呑みこめてないとはいえ、“一般人”、それも比較的拓馬に近い存在である麻衣が居るというのに、彼女は喋りすぎではないのか？

「おい」

「何？ 質問ならもう」

「なんで麻衣までいるのに、あんな話を俺にしたんだ。人払いならもっと上手くできたはずだろ」

拓馬の質問に麗は面食らったように黙ってしまった。「こいつは

何を、聞くまでもないコトをわざわざ」といった顔をしている。拓馬は先程とは違う種類の冷や汗が流れるのを感じた。麗は固まる拓馬に質問の答えを返す。やめろ、聞くな、と心の奥底からの叫びを聞いたが、拓馬は動けない、耳を塞げない。麻衣が、何事か叫んでいる「やめて」と、薄い唇がそう動いた気がした。

「その娘、玄英なんだから、当然でしょ」

「は……」

「なんでそんなに濃い気配を漂わせて、今まで検査をぐりぬけてきたのか知らないけど、あなた、相当なモノね。今回の事件の顛末は、いずれ国内全ての玄英たちの知るところとなる。“此方”とは違った意味で大騒ぎだからね。あなたほどの玄英に、隠す意味も無いでしょう」

「何を、言って」

打越麻衣がマレビト　玄英である。そんな話は聞いたこともないし信じたくもない。麻衣の両親は、たった普通の会社員で、玄英などと縁のある人物ではないというのに。

「本当に知らずに喋ってたの？　あなたの評価、あらためなくちゃね。」

「どういふ事情か知らないけど、そーゆーことよ。玄英である自分の立場が危うくなるようなこと、そうそう言えないでしょう。だから口封じも人払いも必要ない。わかった？」

「麻衣……」

「拓馬、あのね」

拓馬は麻衣に尋ねる。今日玄英の話がでる度に歯切れが悪かったのは。普段なら気を遣って別の話題を振るとか、そうした配慮を見せる麻衣が、今日に限って直球であの夜のことを聞いてきたのか。麗が玄英の秘密をぺらぺらと麻衣のいる前で喋り続けたのは。

「検査の結果、出て……先週、お父さんやお母さんと一緒に、先生に呼ばれたの。あたし、玄英なんだって。遺伝じゃなくても、“そうなる”ことがあるんだって」

「ウソだろ」

「うつん、本当。だから皆と一緒にいられるの、今学期が最後なんだ。だからね……最後に、拓馬には、本当のこと言おうと、思ってた……」

言って麻衣は、言葉を詰まらせる。

「そういうことか」と麗はバツの悪い顔をして癖っ毛の広がる頭をかいた。

拓馬は、何も言えない。そんな拓馬の様子に麗は溜息をつき、

「迎えがくるまで、あと少しある。私は校門で待ってるから」

そう言って未だ雨の降りしきる屋上を立ち去った。残されたのは、ずぶ濡れの男女。

拓馬は「麻衣」と力なく呼ぶことしかできない。麻衣はただ「ごめんね」と繰り返し、繰り返し、謝罪の言葉を並べていた。

麻衣は何も悪くないのに。そう思えども、土砂降りの中で涙

を流す麻衣に、拓馬は声を掛けることができなかった。

第五話 麗水の里・一

ああ、これは夢だ、と臆気ながらに思う。明晰夢というやつだ。久しく見ていないその夢は、とても現実味にあふれていて、それでも夢だと気付けたのは、それが思い出の一頁の再現だったからだ。

“僕”は旅立つ“彼女”を見送ろうとしている。里の入口に停まる車、乗り込む彼女。あの時僕は、悲しそうに背を丸める彼女に何も言えなかった。激励も惜別も、あの時の僕らの別れには、どんな言葉も相応しくないように思えて。そう思う一方で、何か言うべきだったような気がしてならない。

夢であるなら、あの時言えなかった事を、と思うのだけれど、かけるべき言葉が今になっても浮かばない。ずっと考えていたように、何も考えていかなかったのかも知れない。

「私達が何者で、何処へ向かおうとしているのか、私はそれが知りたいの」

彼女はそう言って自らの運命を受け入れた。去っていく彼女にどんな言葉を贈るべきだったのか、今でも分からない。それ以来、僕は彼女と会っていない。無言の別れ。それが僕の、最初の後悔だった。

「……ら！ おいコラ湧祥！」

「んん？」

ひどく乱暴でぶつきらぼうな声に呼ばれて、少年は目を覚ます。白の道着、黒の袴に身を包み、腰近くまで伸ばした黒の長髪を首元から結って纏めている。伸ばしてある顎鬚が実年齢よりも成熟した印象を懐かせる少年は、なぜか刀の納まっていな、空の鞘を手に持ち座禅を組んでいた。

少年の名は、澄水湧祥。渥美の里を治める澄水家の、跡取り息子である。

どうやら道場で独り瞑想していたら寝てしまっていたらしい。師匠に見つかれば大目玉を食らうところだった。不機嫌そうな面であって来た“目覚まし”に湧祥は感謝する。

「いやあ、起こしてくれて助かったよ、威」

「ああん！？」

「それにしても珍しいな威。お前から道場に来るなんて。ふあ」

威と呼ばれた男は、そんな湧祥の態度に更に機嫌を悪くしたようで、欠伸をしつつ伸びをする青年に詰め寄る。

派手な金属製の花飾りを着崩したスーツの襟にあしらった、場末のホストのようなと表現するのもホストに失礼なくらい、悪趣味な格好をしたガラの悪い青年の名は、佐志威。こんな態でも里

の有力者の一人であるから人間分らないものだ。

「用が無きゃこんなトコ来ねえよ。呆けてる場合じゃあないぜ、湧祥」

「まあまあ、落ち着けて。そうだ、最近上手そうな酒を通販で買ったんだ。今度一緒にどうだ？」

「お断りだ。テメエ未成年だろうがよ」

「なんでこういう時だけカタいこと言うんだよ」

「バレてジジイにどつかれんのが俺だからだよ、タコ。」

「そう言うなって、俺たち酒の玄英同盟の仲じゃないか」

「……ああもう、しゃーねえな。分かったよ、フツーに話す」

ケタケタ笑う湧祥の冗談に毒気を抜かれたのか、威はその場にとかつと座り込み、性急な姿勢を改める。湧祥も、そんな威の態度に笑みを消して目を細める。本題に入れということか　そう納得した威は話を切り出す。

「変若水の滝の近くで殺された人間のガキ共、生き残りを呼んだのはお前か？」

「いいや、清一郎殿だ。表向きは俺の親父が呼んだことにしてあるがな。もう麗を迎えにやっている。さすがに仕事が早い」

湧祥は「俺も近いうちにその少年と話がしたいと思っていたしな」

と頭を振るが、威が食いついたのは別の個所だった。

「麗あ？ あの短気でチビの鉄砲玉を使用者に？ あいつ人間に何すつか分かんねえぞ。今頃“外”でチカラ使っちゃうなんてへマやつちやいないだろうな？」

酷い言われようだったが（そして予想は的中していたが）、心配であるという点に関しては湧祥も同様だったようだ。どうフオー！すれば良いか、といったふうには苦笑する。

「いや、その、本人が強く希望してな。里の対外折衝の大半を担っているのは清一郎殿 麗の御父君だからか、麗も外の世界には人一倍、興味があるのだろう」

「じゃじゃ馬の妹分を持つと大変だな湧祥。……ところで、ガキを斬った下手人、見当はついてんのかい」

「いや、大して絞り込めていないのが現状だ。なればこそ、多少無理な手を使つてでも、唯一の目撃者に話を聞きたい。犯人を野放しにし続ければ澄水の、いや渥美の里の沽券に関わる。『約誓の領』が何を言ってくるか」

物憂げな顔で答える湧祥とは対照的に、威は喜悦を深めて更に問う。答えが待ち切れないといった感じた。

「もしもだ、万が一にだせ、殺つたのが俺らの身内、なんてことが分かつたら……どうするよ？」

「考えたくないことだが、内々に処理するしかあるまい。今、里は跡目争いで揺れている。余計な火種は撒くべきではない」

「つまり、下手人は？」

「殺す」

「身内じゃあなかったら？ ただの一般人だったら？」

「それでも殺す」

「カハッ」

威は狂ったように哄笑する。その言葉を待っていた、心底愉快でたまらない、そんな心情を隠そうともしない。

結局、我ら玄英はそんなものかと、牙を剥く威を見て湧祥は悲しく思う。所詮玄英は、人の皮を被った鬼なのかと。

「どつちみち殺すんじゃねえか、さすが、“澄水の鬼子”は言うことが違うねえ」

「それでもしなければ、我らの霊域で散華した魂、安んずることは叶わん」

「ハッ、理屈なんざ、どうでもいいがよ、ちゃんと俺の出番も残しておいてくれよ次期当主様」

「期待している。思う存分暴れる」

「おおよ、その言葉、忘れんじゃねえぞ」

そう言つて、威は笑いながら立ち去る。結局のところ、彼は許可を貰いに来ただけにすぎない。好きなだけ戦つてよいと、その身に宿す暴力を、解放しても良いと、その許しさえあれば満足する。佐志威はそういう人種だった。そして自分も、その身に修羅を宿す

「いや、そうじゃない。人も玄英も、鬼を宿すから鬼と成るのではない。人であることを止めた者が、鬼に成るんだ」

「だが……この里を守るためならば、俺は喜んで鬼になる」

暗い思考に堕ちていく己を律し、湧祥は道場の門をくぐる。外は、土砂降りであつた。降り注ぐ雨も意に介せず、湧祥は右手を高く天にかざし、そして唱える。

『あまのまなみふるすぎ、成れるは剣、細水』

その言の葉を合図に、湧祥の頭上、天より落ちる雨が曲がる。湧祥のかざした右手に、大粒の雨が聚まりだす。それはやがて巨大な水球と成り、宙空を漂う。湧祥は右手に力を込めると、象ほどの大きさの水球は瞬く間に形を変え、細長い棒状のものと成る。

それは、刀であつた。巨大な水の玉は小さく小さく、四尺ほどの刀へと変じたのである。

湧祥はそれを手にして、横薙ぎ一閃。すると、遠く離れた正面の樹木が音も無く斬り飛ばされる。

「なあ、本当に、俺たちは何処へ向かっているんだろうな、リコ」

雨より成つた太刀を空だつた鞘に納め、湧祥は道場を後にする。

“ 変若水の滝 ” 澄水が代々守り通してきた聖域。一族の聖地で無法を働いた正体不明の玄英。

その魔手から唯一逃れた少年、早瀬拓馬との邂逅が里の運命を大きく変えることを、湧祥はまだ知らない。

第五話 麗水の里・一（後書き）

未成年の飲酒は法律で禁止されています。真似しないでくださいね。

第六話 麗水の里・二

結局、麻衣に何も言う事ができなかった拓馬は、とぼとぼと麗の待つ校門までやって来た。

校門では既に麗と迎えの車が拓馬を待っていた。「やっと来た」という心配顔で拓馬に駆け寄る麗とは対照的に、車の運転席に座る男は苛立ちを隠せない様子で拓馬を睨み付けていた。「迎えはまだ来てない」と麗は言っていたが、運転手の反応を見るに、どうやら気をきかせた嘘だったらしい。

「それで、彼女のこと、ちゃんとフォローしてきたんでしょうね？」

「えっと、それは」

口ごもる拓馬の反応を見て全て察した麗は、盛大に溜息をつく。

「このへタレ。本当に マツいてんの？」

「……」

「ま、いいわ。早く行きましょ。ここから私たちの里まで、結構遠いんだから。あ、それと」

「えっ」

何事か思い出したように、麗は突然手を伸ばし拓馬の制服の胸ポケットに触れる。動揺する拓馬。次の瞬間、
ずぶ濡れの拓馬の服が一瞬で“乾いた”。制服にしみ込んだ水を、

全て弾き飛ばしたようだった。

「濡れたままじゃ風邪ひくわよ」

こんな便利な使い方があるんだなと、冷えた心で、何の感慨も無く拓馬は思った。

車の中では、麗の容赦のない罵詈雑言が浴びせられた。曰く、玄英だからといって構えすぎだとか、ああいった突然変異型には心のケアが重要なものとか、しまいには女心を判つてない云々……どれも最終的には「慰めの一つもかけられないのかヘタレ」という結論に落ち着いた。

止まることの無い麗の叱責に、頂垂れるだけだった拓馬にいつしか反発心が湧いてきた。其方の都合で人を引つ張り回しておいて、どの口が言うのだと。

しかし、そんな感情はすぐ見咎められた。

「あんた、今お前らのせいだ、って思ったでしょ」

「……そうだよ、違っつて言いたいのか」

見破られた気恥ずかしさからか、拓馬はついムキになって言い返す。

「いいえ、間違っつてないわよ。あなたは玄英に友達を殺された。玄英に悪印象を持ってしまうのも、当然のことね。今私たちがしていることも、常識外れで、あなたに迷惑をかけていることは申し訳な

く思ってる」

「だったら」

俺のことは放っておうてくれ、なんでそこまで俺が詰られなきゃならないんだと、拓馬は言葉を継ぐはずだったが、

「でもその事と、あの娘の事情は無関係よね」

麗の一言が胸に突き刺さる。

「じゃあ貴方、私たちがあなたを連れていかなかったとして、あの娘に気のきいた台詞を一つでもかけられたかしら？ あなたの友達を殺したのも玄英、自分も玄英。きつとあなたと、今まで通りの関係ではいられない。そんな考えに囚われてる彼女に、あなたは何か言う事はできた？」

「できないでしょうね。今、彼女との関係がどうあるべきか、あなたは答えを出せないでいる。そんな状態で口をついて出た言葉じゃ、彼女には響かない」

「なんでお前に、そんな事が分かるんだよ」

「分かるわよ、それくらい……」

そう言ったきり、麗は黙ってしまった。拓馬はいたたまれなくなつて、逃げるように窓の外に視線を移す。雨は、既に止んでいた。

「分からないなら、そう言ってあげればいいのよ……」独り言のように呟いた麗の言葉が、なぜか胸に痛かった。

拓馬の高校から車で約四時間、曲がりくねった山道を駆け抜け、森を抜けた瞬間、一気に視界が開けた。

「ようこそ渥美村へ。ここが、私たち水の玄英の里よ」

麗は、わざわざ拓馬を車から降ろし、里の全景を拓馬に見せようとす。面倒がった拓馬だが、無理矢理引つ張り出されて目に映った景色に、息をするのも忘れた。

「……すげえ」

拓馬は車内での鬱屈した気分がしばしの間吹き飛ぶ程、目の前に広がる光景に圧倒されていた。

一言でいうならば、それは“水の里”であった。山々の間に立ち並ぶかやぶきの屋根、農業用水の他にも、まるで血管のように張り巡らされた水路、そして何より幻想的だったのは、水路の水をすくいあげ、球にして楽しそうに戯れる子供たち。まるで、御伽噺の世界に迷い込んだような心地になる。山中だというのに、まるで島に居るかのような感覚を懐く。

これが、玄英の里。世に疎まれ、世に反発し、歴史の表舞台に躍

り出た異能者の楽園。もつと、殺伐とした所だと思っていた。拓馬は現代社会の授業で玄英に懐いていたイメージを大きく覆された気がした。

「あ、湧祥様！」

麗の嬉しそうな大声に、拓馬は現実には引き戻される。麗が手を振る方向を見やると、スーツを着た若い男がこちらへ向かってくる。

スーツと顎鬚のせいで大人びた印象を与えるものの、よくよく見れば、見た目の年齢は拓馬とさほど変わらないように見える少年であった。痩身、だが鍛え抜かれた身体はスーツの下からでも十二分の存在感を放っている。身長も180cm近いだろう、引き締まった体格も相まって、それなりの威圧感を与えるはずだが、柔和な笑みがそれを減殺していた。

顎鬚さえなければ女と見紛うほどの透き通った目鼻立ちに、あるいは顎鬚はそんな自分の顔に対するコンプレックスの表れか、腰近くまで伸ばした長髪を結び編んでいる様は、浮世離れた印象を拓馬に植え付けた。

麗に湧祥と呼ばれた少年は拓馬に一礼し、告げる。

「ようこそ渥美村へ、早瀬拓馬様。突然のことで、戸惑われておられるかもしれませんが……我々にもあまり余裕が無いのです。御容赦ください」

「私は澄水湧祥。この里を治める玄英、澄水漣生の息子です。以後、お見知りおきを」

第七話 水衞み・一

里の入口から澄水の屋敷までは車道は無く、移動手段は徒歩か馬か自転車なのだという。「いつの時代だよ」と思いつつも、文句を言っても仕方がないので、拓馬たちは少々歩くことにした。

屋敷に向かう間に、拓馬は湧祥から簡単な説明を受けた。

澄水家は代々、渥美村を中心とした一帯を治める玄英の一族であること。

高校生惨殺事件の現場は、澄水家が管理する聖地せいちのすぐ近くであるということ。

この事件によって、玄英は危うい立場にあるということ。

事件を重く受け止めた、各地方の有力な玄英で構成される“座”が

『約誓の領』というらしい 早期解決が望み薄ならば介入も辞さない意思を伝えてきたこと……

「澄水家も約誓の領ではそれなりの地位にあるのですが、“上”の意向には逆らえない。お恥ずかしい話です」

湧祥が言うには、約誓の領にも序列が存在するらしく、上位の名家には表だって反発できないルールがあるらしい。介入されれば里の者が処刑される可能性もあると聞いて、拓馬は背筋が冷えた。あまりに前時代的すぎる。

「血で血を洗う約誓の領同士の抗争など、今では殆ど無くなりませんが、それでも彼らを未だに恐れている者は多い」

それで今回のような、拓馬の強引な招致に至ってしまったと、湧祥は重ねて謝罪する。現状、事件解決に最も有益な情報を有してい

るのは間違いなく拓馬。話を聞くだけでなく、その身柄を確保しておかなければ、いつ、どこで、誰に出し抜かれてもおかしくはないならばいっそ、里に招待して他勢力からの干渉を防ごう、という発想だ。

「本来なら、こちらから伺わねばならない立場なのですが。生憎と自分は里から出られないので」

「はあ」

湧祥の話に拓馬は気の無い答えしか返すことができない。今まで触れ得なかった価値観と世界に圧倒されていた。

「ちよつと、湧祥様の話、ちゃんと聞いてるの？」

そんな拓馬の様子に、黙って聞いていた麗がギロリと睨んでくる。
が、

「麗、客人に対して失礼だぞ」

「……はあい」

湧祥に窘められて、麗はしゅんとする。ただでさえ小さな背が更に小さく見えるほどの落ち込みっぷりだ。だがそんな様子も、いかにも主従といった固い感じではなく、どこか微笑ましいやりとりを感じた。この二人、一体どんな関係なのか。元来好奇心旺盛な拓馬はそれを聞きたくでしょうがなかったが、麗に怒られそうだという第六感がはたらいたので、やめておいた。

里の入口から澄水の屋敷まで、歩いて一時間以上かかった。話しながら休みながらとはいえ、起伏も多い道のりで、普段陸上部で鍛えている拓馬でも少々疲れた。

ようやく見えた澄水家の門は、時代劇のセットかと思うほど巨大であった。実際、そんな時代から存在したのだろう。

ふと、門の前に一人の女性が居ることに拓馬は気付いた。白衣に緋袴、遠目にもそれが巫女装束だと判る。

「透子様！」

隣で麗が叫ぶ。ぴよんぴよん飛び跳ねて身体全体で嬉しさを表現する。そんな麗を見て湧祥は笑っていた。

麗の声に巫女装束の女性は振り返る。一行を見て恭しく一礼する様はまさに清楚が服を着て歩いているかのような振る舞いであった。

「透子様、どうされました？」

「いえ、継承式のこと、湧祥様にご相談したいことがありまして。そちらの御方は？」

とてもゆつくりと、おつとりと話す女性だった。しかしそれが嫌味にならない雰囲気は彼女は醸し出していた。

「こちらは父の御客人で、早瀬拓馬様です」

「初めまして早瀬様、私、渥美村で巫女を務めております、水守透子と申します」

「あ、どうも、早瀬です」

深々と頭を下げる透子に、拓馬も慌てて礼をする。屋敷に向かう道すがら、村人とすれちがう度にこんな調子である。麗の自分に対する態度とのギャップに少々面食らっている。そんな拓馬をよそに、

「では透子様、しかる後」

「はい、湧祥様」

互いに笑顔を交わし別れる二人。透子は門をくぐり屋敷の中へ入っていった。

「早瀬様、今日はお疲れでしょう。詳しい話は明日伺いますので、今日はおゆるりと」

「はあ……」

終始圧されっぱなしで、屋敷に入る。屋敷の中でも庭の美麗さだとか、夕飯の豪華さだとか、風呂の広さだとかに圧倒されつつも、拓馬は長い長い一日を終える。

はずだったのだが。

男女の声に、拓馬は目を覚ます。用意された服（迎えの者が拓馬の家から持ってきてくれたもの）に着替えて、外の様子をうかがう。

「確か、水守、透子……さん？」

見ると、夕方門前で出会った巫女装束の女性、水守透子が何者かと会話している。会話の内容までは聞き取れなかったが、別に喧嘩などをしていないわけではないことは音量で判る。

透子は男の影に一礼して、夕方と同じようにゆっくりした動作で踵を返す。屋敷を出る様子だった。枕元に置いてあった腕時計を確認すると、日付を越えようとしている。

こんな時間に何を……と拓馬の脳内は湧きあがる好奇心で埋め尽くされていく。しかし勝手に出歩くわけにもいかないし、それに女性の後をつけるというのも気がひける。やめやめ、と再び布団に戻ろうとした拓馬の目に、透子の後を追う小柄な男の影を見た。男が腰に差しているモノを見て、拓馬の心臓は凍りつく。

刀 暗闇の中だったが、夜目がきくほうである拓馬の眼にはそれがはつきりと映った。危険だ、と反射的に感じた拓馬は慌てて男の後を追う。

二人の男に後をつけられていることを知ってか知らずか、透子は森の奥深くへ入っていく。それを追う小柄な男、さらにそれを追う拓馬。

内心びくびくしながら進む拓馬。

だが男の手が脇差に伸びた瞬間、理性は吹っ飛んだ。

助けなきや　　という思考に支配された拓馬は男に飛びかかり、男も突然の襲撃に転がり倒れる。拓馬は男の刀を奪おうともみくちやに暴れるが、相手は武道の心得があるのだらう、あっさりと拓馬の関節を極める。

拓馬はいまさらながらに自らの軽拳を後悔した。

「貴様、透子様に何をするつもりであった!」

「……………へ?」

一瞬、死を覚悟した拓馬であったが、男の言葉に頭の中が疑問符で埋め尽くされる。

「何をって……………俺はアンタが透子さんを狙ってると思って」

「……………え?」

ぼかんとして見つめ合う二人の男。そこへ尋常ならぬ物音を聞きつけて透子が引き返してきた。

「作次!　どうしたのです……………あら?」

「……………」

事の次第を聞いた拓馬は、恥ずかしさで死にそうになった。元々は夜半に帰ろうとする透子を案じて、湧祥が護衛をつけようとした

のを透子が断つたらしい。一度は納得した湧祥だったが、やはり心配だったのか作次という名の小姓を護衛にやったのだという。

「本ツ当に、すみませんでした」

「良いのですよ、私の身を案じてくれたのでしょう？　ありがとうございます。ございます。此の事は内緒にしておきますから。ね、作次」

「もちろんですとも。しかしなかなか見どころのある若者ですな。どうです、うちの道場に通われては？」

透子からは悪戯っぽく微笑まれて、作次からは割と本気で勧誘されて、拓馬は穴があつたら入りたい気分になった。

しかし、和気藹々ちした空気は突如として破られる。

「ぐむっ」

突然、奇妙な呻きとともに作次の顔が引き攣る。

「お二人とも、逃げ」

最後まで言葉を継げずに、作次の首が飛ぶ。

それが突如作次の背後にあらわれた男の凶刃によるものだ、透子と拓馬が理解するより早く、次々と現れる影に動きを封じられていた

あまりに突発的な事態に脳の処理が追いつかない。ついさっきま

で話していた作次は死に、自分は透子と共に捕らわれた。

(これ、本当の、刺客って、死……)

混乱していく拓馬を見て、作次を葬った黒ずくめの男が声を発す。

「動くな、騒がねば命までは取らない。我々の言う事を聞いてもらう」

なんでこんな目に遭わなきゃならないんだ、と最早現実に対する憤りを感じるよりない拓馬に、新たな、しかし知った声が投げかけられる。

「お前たち、何をやっている」

それは、闇の向こうから、やけにはつきりと聞こえてきた。

「湧祥……さん？」

「何やら殺気を感じて、きてみれば……」

拓馬と透子を捕えたのは、全身を黒で塗り潰した忍の如き集団であった。現れたのは七人。うち二人が無駄の無い動きで拓馬らを羽交い絞めにしていた。その光景を見、湧祥は咄嗟に腰の細水 水の刀を抜き放つが、黒ずくめの集団の一人が抑揚の無い声でそれを制止する。

「動くな。動けば一人ずつ殺す」

その声は、強風吹きつける中であっても、はっきりと聞こえた。湧祥は大人しく従い、細水を納める。「動けば殺す」ということは、襲撃者たちにとって透子たちはまだ利用価値のある存在ということだ。二人を救う機会を窺いつつ、敵の目的を聞き出すのが最善と湧祥は判断した。

「刀を捨てる」

細水を鞘ごと敵方へ放り投げる。主を失った剣は瞬く間に水へ還り、地面をしとどに濡らす。それを見届けた襲撃者のうち二人は湧祥に近づき、手にした刃を首へ突き付ける。

「捜す手間が省けた。澄水湧祥だな」

「何のことだよ。俺が湧祥様に見え……」

「惚けずともよい。先程この男がお前を呼んでいた」

湧祥は拓馬を「む」と恨みがましく見つめる。言われて拓馬は、自らの迂闊さに気付いたようだ。申し訳なさに顔を伏せる。その姿に湧祥は少々罪悪感を懐く。湧祥としては、そこまで深い批難の意味を込めて拓馬を睨んだつもりではなかったのだが、拓馬が荒事に不慣れな一般人であったことに思い至り、少し反省した。

「俺を澄水の跡目と知っての狼藉か。目的は」

「其方に囚われている我等の仲間の解放。そして、変若水を渡して

もらっ」

襲撃者たちは、自らの正体を隠そうとしなかった。澄水に仲間が捕えられていて、変若水を狙う者など、湧祥は一つしか思いつかない。

「客神派か」

国と玄英が和解した今も、闘争を続ける者たち。玄英は人間より優れた超越者、異なる理に生きる神の眷属。そんな凝り固まった思想に取り憑かれたテロリスト。かつて永きに渡る圧制と差別に反旗を翻し戦った者たちの自称であり尊称であった者たちの名は、忌み嫌われる暴力の権化の蔑称と化していた。

本来客神派と呼ばれていた者たち 国家と和解した主派と袂を分かった彼らは、より大きな力を求めて玄英名家の秘宝を求めて暗躍している。

「お前が喋る必要は無い。夜明けまでに事を運んでもらおう。急がねば人質を殺す。此奴らの素性もわかっている」

拘束する黒ずくめの持つ刃が拓馬の首に食い込む。それを見て湧祥は「わかった」と両手をあげて意思表示をする。

「……従おう。仲間を解放する。変若水も、全てとはいかないが渡そう。それでいいか？」

「いいだろう。人を呼ばれては困る。こいつらの解放は最後だ。」

「わかった。その前に一つだけ、質問させてくれないか？」

「何だ」

「お前たちは北の関から来たな。見張りの者はどうした」

「さあ、知らんな。はやく案内しろ。次に不審な動きをすれば、人質の命はないぞ。こいつのようにな」

湧祥の鎌かけにも動じず、客神派の男は足元に転がる小姓の首を蹴飛ばす。湧祥の足元まで転がり落ちてきた首。何も見えていない小姓の目が、湧祥を見つめた。

「そうか……ならば」

湧祥は物言わぬ作次の生首から目を逸らし、全身の緊張を解く。息を大きく吸い、告げる。森を震わす大音声を以て、襲撃者たちへ死刑宣告を下す。

「ならば、死ぬれ。この……畜生共があッ！」

怒号とともに状況は一変する。湧祥は素早く後方に飛び退き、両の手をかざす。湧祥の豹変に一瞬怯んだものの、冷静さをすぐに取り戻した男は、拓馬の首に凶刃を走らせる。が、その刃が拓馬の喉元を掻き切ることは無かった。振り下ろそうとした男の腕は途中で止まりブルブルと異様に震えだす。

異変が現れたのは透子を拘束していた男も同時、同様であった。刃を落とし、頭を、腹を抱えて苦しみだす。拓馬は、この状況に見覚えがあった。脳裏に浮かぶ、友人達が惨殺された忌まわしき夜、鬼は雄太に触れることなく、しかし雄太を何がしかの力で苦しませ

ていた。そしてあの時、雄太は。

二人を捕えていた男が苦しみだして、数秒と経っていないであろう、腕、腹、頭　異常に膨れ上がった部位は一瞬で爆発し、血と臓物を撒き散らした。それと同時に、湧祥の口から風鳴りの如き呪いが紡がれる。

『御佩しませる十拳劔、手上に集まれる血、手俣より漏き出で成れる神の銘』

湧祥の傍にいた襲撃者二人は、ただならぬ気配に恐れを懐いたまま湧祥に襲いかかる　この男は危険だ、止めねばと。だがそれは戦場の常、冷静さを失った者から順に死んでいく運命。狂乱し常ならぬ力を発揮できるのは、その身に相応の暴力を宿す者だけだ。その点でこの二人は、生き残る資質を持ちえなかった。

『火神の血より成れる、其の刃、闇満波』

爆ぜ絶命した二人の襲撃者、その血潮は湧祥の呪詛に呼応して形を成し、紅い刃と化す。宙に現れた血刃は大小合わせて百以上。それら全てが、瞬きよりも早く湧祥に迫る襲撃者を襲い、本人も気付かぬうちに、血の大刃が彼らの頸を斬り飛ばす。

『散らせよ　チノミハカシ』

数瞬遅れて殺到した数多の刃が襲撃者の身体を微塵に刻む。残るは三人。湧祥は攻撃の手を緩めない。生まれ出た血刃は渦を巻いて暴れ出し、それでいて拓馬らには一切触れることなく、敵の一人を残して切り刻んだ。

血刃の嵐で結い糸が切れたのか、湧祥の長髪は解けて風に揺れる。強風で逆立つその黒髪は鬼を連想させる。

血の雨が降り注ぎ、飛び散った臓物が木々の枝に引っかかる森は、平素の美しさの欠片も無い。だが見る者が見れば、その凄絶さに感嘆したかもしれない。それは最早、狂人の思考であるのだが……湧祥は心の何処かで、この光景を美しいと思う。命の散華するこの瞬間を、血と臓物の舞う戦場を、愛おしいとさえ。

それが、湧祥が自らを鬼と自認する理由の一つ。

感傷に浸りつつも、仕上げの一撃は過たない。最後に残った襲撃者の両手両足に血の針を何本も飛ばし、地に縫い付ける。六人の血を吸った刃は膨れ上がり分裂し、その数は一人に突き付けるには余りに膨大だ。地に押しつけられ、無数の刃に囲まれた男に、湧祥は語りかける。

「があっ、はっ」

「残念だったな。俺は初めから、貴様らに屈する気なんて無いよ」

「この……化物め！」

「あまり動くなよ。折角急所を外してやったんだ。お前は連絡役死んでもらっては困る」

戦端を開いた憤怒とは対照的に、湧祥は冷やかに告げる。四肢を貫いた血の針を抜き、血塊を布状に変化させ、男の身体へ巻きつける。喚く男の口にも猿轡を噛ませ、宙空へと持ち上げた。

「帰って仲間たちに伝える。澄水者に手を出せば、いかなる報いを受けるか。ああ、それと」

「……！……！」

未だ何事か叫ぼうとする最後の襲撃者を、湧祥は血の布を振り回して彼方へ放り投げる。死なれては困るので、それなりの加減はしたが。

「お前らの仲間、とつくに刻んで鯉の餌にしたよ」

敵を放った闇の向こうへ声を投げる。それを最後に、湧祥らに向けられていた敵意は完全に消失した。戦い　とも言えぬ一方的な蹂躪の幕は閉じた。湧祥は振り返り、捕まっていた二人の無事を確認する。

「怪我は無いですか、二人とも」

「ええ、私は大丈夫……です」

どこか悲しそうに目を伏せ答える透子。そして、

「どうした、拓馬？　気分が悪いか？」

拓馬の様子は目に見えておかしかった。膝が笑い、カチカチと歯を鳴らして震えている。人死になどに滅多に立ち会わない一般人が、短期間に二度も修羅場に遭遇してしまつては無理もないことだと湧祥と透子は思い至つた。が、その解釈は正しいようで間違つていた。

拓馬の意識の内では、過去と現在の光景が重なりリフレインしていた。

真っ先に襲撃者を屠った湧祥の技、二週間前の夜に雄太を殺した鬼蜘蛛の業。人間を内から爆発させて殺害する。変幻自在にカタチを変える刀、そして振り乱した黒い髪。湧祥と鬼の姿が、重なる。

呼吸ができない。息が苦しい。喘ぐ拓馬に、近づき、手を伸ばす湧祥。それが限界だった。振りきれた理性の針は拓馬の意識に過負荷を与え、二週間前の夜と同じく、拓馬の視界はブラックアウトした。

第八話 水衞み・二

目覚めた拓馬の目に入ったのは、板張りの天井。漂うのは新しい畳の香り。夏の盛りだというのに、涼風が部屋に流れ込んでいる。記憶が曖昧で混沌としている。確か昨日の夜、森へ入っていく透子を追って、それから何者かに襲われて……

そこで、拓馬の思考は俄かに蘇った。慌てて上体を起こしたせいで眩暈に霞む視界も気にせず、辺りを見渡す。

そこは自宅の八畳間とは比較にならない程にだだっ広い和室だった。布団に寝かされている。手元に濡れたタオル 額にのせていたのだろう、傍らには水の入った桶があり、中の水はまだ冷えていた。誰かがつい先程まで、見ていてくれたのだろうか

拓馬は立ち上がり、障子を開いて部屋の外にでる。そこで目に飛び込んできたのは広大な庭だった。至る所に水が流れ、苔むした石灯籠が配置してあるのは、澄水の屋敷と同様であったが、庭を囲む塀の高さや瓦の色合いなどが微妙に違っている。

自分はいれからどうなったのか、どういった経緯で此処に運ばれたのか、寝かされて看病されていたことを考えれば、逼迫した状況でないことは推測できるが……

どう行動すべきか悩んでいると拓馬に背後から声が掛けられる。

「お目覚めでございましたか」

振り返ると、着物を着た年若い女性が楚々とした佇まいで拓馬を

見ていた。

「お体のほうは、大丈夫ですか？」

「ええ、まあ、お陰様で。あの、ここは一体」

「汀家の御屋敷にございます。昨晚、お倒れになった早瀬様を、湧祥様がここへ」

「そうだったんですか。ありがとうございます」

「御礼ならば、麗様に。一晩中、早瀬様のお傍にいらっしやっただうですから」

「そう……ですか」

あの傲岸不遜な娘が？ と拓馬は俄かには信じ難かったが、割と与えられた任務には忠実なようだったし、自分の身辺警護に任を務める以上、責任を感じていたということか。夜中に勝手に抜け出したのは拓馬自身なので、何もそこまで、という気分になったが、拓馬は一応納得することにした。

「朝食の準備が整っておりますが、召しあがりますか？」

「あ、すみません。いただきます」

「お洋服がお布団の側にございます。お着替えが終わりましたら、お呼びくださいませ。皆様お待ちになられておりますので」

「……みなさま？」

朝食会場の大広間へは歩いて五分近くかかったが、拓馬にとってそれは大きな問題はなかった。目の前には豪勢な朝食。和食好きの拓馬にとつて、絶妙な塩加減の焼き魚や山葵で味付けした昆布など、美味珍膳の山であつたとか。昨夜の出来事のシヨックが抜け切れなうであるう拓馬に配慮したのか、全体的に薄い味付けであつたとか。そんな諸々を考える余裕は拓馬には無かつた。

場は非常に重苦しい雰囲気にもまれていた。床の間の掛け軸の前に湧祥、その左隣に拓馬が座す。拓馬の正面には猛禽の如き目つきの大男、そして他には、拓馬が里に来て顔を合わせたこともない男たちが強面を並べていた。みな、表情筋がおかしくなつたのかと思ふくらい、その仏頂面を崩そうともせず、淡々と朝食を口に運んでいる。

隣を見ると、やはり淡々と朝餉を食す湧祥と目が合う。湧祥は「我慢してほしい」と申し訳なさそうな顔で目配せする。普段滅多に味わえない豪華な朝食もろくに味を感じない状況　諦めるよりないらしい。

少し離れた下座へ目を移すと、麗もいた。昨日見たときのような覇気はなく、心なしか怯えているようでもあつた。

息詰まる空気を保つたまま、皆が朝食を食べ終わる。膳を下げさせ、最初に口を開いたのは、白髪交じりの壮年の男性だつた。

「皆、よう来てくれた。今日わざわざ此処に呼びたてたのは他にもない、二週間前、変若水の滝近くの森で一般人の男子高校生が殺害された件についてだ」

ただでさえ緊張していた場の空気が三割増しで固くなった。正直勘弁してほしいと思う拓馬をよそに男の語りは続く。

「県警からは玄英による犯行の可能性が高いとの報告が入り、『約誓の領』から事件の早急な解決を求めるという要望、いや命令が下されたことは、皆の知るところだろう。そこで漣生様の提案により、事件の唯一の目撃者である早瀬拓馬殿のご意見を伺う仕儀と相なつた」

場の全員の視線が拓馬に集中する。

「まずは、自己紹介が遅れて申し訳ありません早瀬殿。私は汀清一郎。渥美村の村長を務めております。此度は娘の失態によりその身を危険に晒してしまったこと、面目次第もございません。今後は警護の者も増やし、二度とこのような事にならぬよう里の者一同、肝に銘じますゆえ、お許しくださいませ」

深く頭を下げる清一郎。それに場の一同が倣うのを見て拓馬は気が動転する。

「いえそんな、謝らないください！ 悪いのは勝手に屋敷を抜け出した自分で……」

「それでも、です。玄英の里の危険を知る我らが、早瀬殿をお守りせねばならぬのは、当然の事。それを怠った末の大失態、いくら頭を下げても足りませぬ」

「分かりました。分かりましたから、本題に移りましょう。俺が呼ばれたのは、二週間前の事件の犯人を暴くためでしょう？」

「それは、まったく」

「一刻もはやく、犯人を突き止めましょう。それが里の方々のためでもあり、自分のためにもなる」

「……いやはや何とも、聡明な御方。この清一郎、感服いたしました。では……」

そう言って清一郎は目を細める。先程とはうってかわって厳然な佇まいだ。

「我々も、事件のあらましについては既に承知しております。我々が知りたいのは他でもない、早瀬殿とその御学友を襲った玄英と思しき男、その能力についてです」

「やっぱり……」

そうではないかと、拓馬は前々から考えていた。県警本部から事件の情報を入手しているにも関わらず拓馬から直接話を聞く、ということ是一般人ではわからない類の話。玄英の力について聞かれる可能性が非常に高いと踏んでいた。あらかじめ用意していた答えを、拓馬はすらすらと語る。

「異能」と言ったらいいんですかね、犯人が使った力は、正直自分にはよくわかりませんでした。凶器は主に刀と糸でしたし、ただ、普通の刀じゃあないように思えました」

「ほう。それは何故？」

「切れ味が鋭すぎるといっか、こつ、ゆっくり横に滑らせるだけで、人の身体を真つ二つにしたんです」

拓馬の言葉に、周囲の気がざわついたのは、錯覚ではあるまい。

「他に、犯人の武器について気になったことは？」

「これは気のせいかもしれないのですが……刀と糸を使っていたというより、刀身が糸になる刀を使っていたように思いました」

ざわ、と今度は真実、周囲がざわめき始める。

「なんとということだ」

「まるで細水ではないか」

「これが温海に知られたらどうなるか……」

ざわめきはやがて喧騒と化し、收拾がつかなくなりかけて、

「やめんか！ 御客人の前ぞ！」

清一郎の一喝で広間に静寂が戻る。

「見苦しいところをお見せしました。それで早瀬殿、他に何か気付いた点はございますかな」

「えっと……」

そこではじめて、拓馬は言い淀む。伝えるべきか、“あのこと”を。昨夜の襲撃者を爆砕した湧祥の技が、二週間前に雄太を死に至らしめた鬼のソレと酷似していたことを。

さすがにそれは躊躇われる。実際に湧祥の技も鬼の技も、その目で見た拓馬は知っている。アレは、自分が懐いていた玄英の技の枠を遙かに超越している。正直あんな強力な使い手が里にごろごろ居るとは思えないし思いたくない。あの技を使える玄英は限られるはずだ。人間を一瞬で血塊に変える技のことを伝えれば、犯人捜しは一気に進展するだろう。

だがもし、あの技を使える玄英が想像以上に少なかったら？

もしあの技を使えるのが湧祥のみだったら？ それは下手人が湧祥だと告発するに等しい。湧祥を次期当主と仰ぐこの場の連中が、湧祥を疑う拓馬を易々と解放するだろうか？ 湧祥を疑っているのかと糾弾されるならなだしも、口封じのために……

「早瀬殿？」

「いえ、すみません、これ以上のことは……」

言えない。言えるはずがない。拓馬はまだ、この里の人間を信頼することはできない。早期解決が図れないのなら、『約誓の領』の介入を許す 湧祥はそう言ったが、仮に湧祥ないしそれに匹敵する、権力に守られた里の有力者が犯人だとしたら、そもそもスマートな解決などできはしない。

ならば約誓の領による介入で危機にさらされる人々はどの道、八方塞がりではないか。それを敢えて自らを危険に晒して、どうこうする義理など無いはず。

本当にそうだろうか？ だったら何故、あの巫女を丸腰のまま

ま助けようとした？

長い沈黙を不審に思う視線を拓馬は感じたが、誤魔化しきれると踏んで、自問する心を押さえつけ答える。

「自分には、分かりません」

「そうですね。いや有益な情報でした、早瀬殿のご協力、無駄には決まっていたしません」

それでその場は解散となり、具体的な対策は幹部会で決定する、という運びとあいなった。拓馬は犯人確保の目処が立つまで里に滞在するというのも、ついでのように決まった。

拓馬は、一年で感じる疲労感を小一時間で味わった気分になり、さっさと休もう部屋に戻ろうとしたが。

「早瀬様、少々よろしいですか」

「え」

広間の会議では沈黙を貫いていた湧祥が、拓馬を呼びとめる。

「色々あってお疲れでしょう。どうです？ 里の名所、ご案内しますよ。気分転換にいかがですか？」

まさかバレた？ タイミングがタイミングなだけに、拓馬は肝を冷やす。考えてみれば、湧祥が惨殺事件の犯人ならば、拓馬があの人間を爆砕する技を二度見ていることを、湧祥は知っていることに

なる。ならそれを会議で皆に告げなかった拓馬を疑うのは当然のこと。

「えっと、いや、自分は今は……」

今湧祥についていくのは危険　そう判断し、誘いをなんとか断ろうとするが、

「まあまあそう言わずに。……皆に隠してることに、あるでしょう？」

小声で囁かれた拓馬は、今度こそ心臓を鷲掴みにされる気分を味わった。

やはり気付いている。誤魔化しなど、どだい無理な話だったのだ。

こんなことなら、肝試しなんてやるんじゃないかった。麗にほいほいと付いていかなければ。安い義憤に駆られて透子を追いかけたりしなければ。何も知らないままでいられたら。絶望が、汗となって全身を伝う。

「それじゃあ行きましょうか、早瀬様」

湧祥はあくまでにこやかに、誘う。その笑顔が、今の拓馬にはひどくおぞましいモノに見えた。

「今すぐ、ですか？」

「ええ、今、すぐにです」

湧祥の言葉に、拓馬は結局、力なく頷くよりなかった。

第九話 水衞み・三

湧祥との「渥美村見学ツアー」は生きた心地が全くしなかった。風雅の意匠を尽くした水の庭園も、名物だという水饅頭も、拓馬には味気ないものに思えてしまう。

そんな拓馬に構うことなく、湧祥は楽しそうに連れ回す。いつそののまま一切を打ち明けてしまおうか。精神的に参ってしまった拓馬を、ここが最後だからと、湧祥が連れきたのは小高い丘の上だった。眼下には、先程まで案内された名所の数々。屋敷から離れた家々に目を移せば、里に到着した時と同じように、豆粒に見える子供たちが駆け戯れるのが見える。

「この里を周ってみて、どう思いましたか？」

もう逃げようはない。ここまで来るのに、湧祥に一切の隙は見つけられなかった。観念した拓馬は湧祥に答える。

「……未だに、信じられません。こんな玄英だらけの村があるなんて、法律じゃあ」

「そう、玄英は全て管理下にあり、いつか人間との完全な融和を夢見て社会的に半隔離状態の生活を送っている」

法の目から逃れ、隠れ暮らしているのなら、流通が整備されているはずがない。里にコンビニエンスストアは存在しなかったが、それに代わる雑貨店ならいくつもあつたし、書籍、文房具、CDなどは拓馬の地元とさして変わらない品揃えだった。さすがに横浜とは比べ物にならないが。

「ですがそれは、一部の玄英に限られた話。国歌と玄英の和解その条件に入っていたのですよ。我々のような、古くから徒党を組んでいる玄英の中には、大きな力。それこそ歩兵一個大隊を凌ぐ戦力を持つ武門や、国家権力に深く浸透している者たちがいる。約誓の領が彼らを統率するかわりに、管理を免れることが保障されているのです」

「それじゃあ、こんな里が他にいくつも？」

「このような里だけではありません。玄英が玄英であることを隠して起業することもあります」

「そんな……」

「仕方なかったのです。玄英をはじめとする異能の者が世に出たことよって、その対応に迫られたのは我が国だけではありません。一世紀遅れでやってきた民族主義への対応に苦慮していた諸外国は、水面下で我が国の責任を追及してきました。簡単に言えば、お前らの所為でばれた、どうしてくれる、といったところでしょうか。ともかくも、内憂外患の政府は早急に国内の問題を解決する必要があった。明るみになった異能者への対応策、その世界的なテストケースとなるために」

早期解決を図った国側は、強硬策を選択。異能者たちの権利闘争は、反旗を翻した客神派と国家の全面対決へと発展する。しかし、国の予想を大きく上回る客神派の戦力に形勢は拮抗し、玄英紛争は泥沼化。国は大きく疲弊することになる。

日本の二の舞になるまいとする諸外国は、「こんな超能力者の存

在は知りませんでした。国が差別や偏見から保護すべき」と早々に融和政策を打ち出す。報道により玄英たちの恐ろしさを見聞きした民衆は、その政策をおおむねプラスに評価した。結局、最初に拳を振り上げた日本だけが、世界から取り残されることになったのだ。

「客神派の要求を全て呑めば、現政権の崩壊は逃れようがなかった。異能に怯える一般市民への配慮という言い訳も成り立ちますがね。既得権益にしがみついた結果が、国際支援の見込めない“戦費”増大による経済力の低下。先進国随一のGDP下落率、平和憲法とは名ばかりの人権無視国家という醜聞。最早、引き返せないところまで来ていたのです。十年前までは」

十年前、首領の死亡に伴って活動が沈静化に向かっていた客神派は和解案を国に提示。双方振り上げた拳を降ろす機会を見失った末の和解。まるで、殴り続けることに疲れた少年同士の喧嘩のような。互い遺恨を抱えたまま、国と玄英は新たな段階に進むこととなった。

「テロリズムに訴える異能者は世界的にも鳴りをひそめてましたし、国内世論も徹底抗戦派は減少傾向にあった。きつと、怒りを保ち続けることに疲れてしまったんでしょね。矛をおさめる時だったでしょう。遅すぎた感は否めませんが」

「まあ、細かい事情は沢山ありますが、渥美村　我々の里には、実はあまり関係が無いのですよ」

「え？」

「澄水家は、相互不干渉が基本姿勢なんですよ。この山間の小さな村で生まれ、死んでいく……それで充分だと、満足だと。国家、玄英の権利、そんなことには興味はありません。夜叉だの蜘蛛だの言

われる澄水の戦士ですが、我々が武を磨くのは、この里を守るため、ただそれだけです」

そう語る湧祥の顔には、哀惜の念が浮かんでいるように見えた。言葉以上に、その武力を厭うような。その力を得たことを、後悔しているような、悩み苦しんでいるような。

「だからこそ、この里の平穩を守りたい。約誓の領の介入は許さない。里の領内で人間を無残に殺め、里に嵐をもたらした者は、なお許さない。だから」

湧祥はそう言って拓馬を真っ直ぐに見据える。

「私たち、いや私のことを信じてほしい。この里に居るかぎり、早瀬様は私が守ります。だから、教えてほしい、あの夜起こったこと、全てを」

「やっぱり……気付いていたんですね」

「ええ。貴方の判断は正しかった。あの場であれ以上の言及をしていれば、清一郎殿でも收拾は不可能だったでしょう」

「湧祥さん、俺は……」

「湧祥」「え？」

「湧祥で構いません。実は、堅苦しい言葉づかいは苦手なんですよ。背中が痒くなってくる」

湧祥は照れくさそうに頬をかいて笑う。昨日はえらく年上に見え

た湧祥。だが今の笑顔は年相応の少年のようなものだった。

「麗から聞きました。御友人が玄英と判定されたそうですね。はやく元の生活に戻って、彼女に会いにいったほうがいい。麗が何を言ったか、そこまでは聞いてません。ですが、開いた溝を埋めるのは、早ければ早いほうがいい。隔たれた距離が、時間と共に広がっていることに気付く前に。そのためにも」

「何で……」

何でそこまで、自分のことを考えてくれるのだろう。単なる事件の目撃者の自分に。里を守りたいのならなおさら、利用するだけ利用すればいいのに、こんな話をする必要は無いはずだと、拓馬は思った。

拓馬の信頼を得て、疑惑の目を逸らすため、という理由は、考えたくはなかった。

何故なら、笑顔で語りかける湧祥の瞳が、これ以上ない程に真摯だったから。だから、

「自分にも、似たような経験がありますから。貴方には、そうなつてほしくない」

信じてみよう。拓馬は思う。この言葉を湧祥の本心だと信じよう。嘘だったのならば、折を見て自分を始末するつもりなら、よく騙せたものだと、笑いながら死んでやろうと。

「……わかった。湧祥、アンタを信じる。話すよ、あの夜のこと全部」

「ありがとうございます」

「敬語」

「え？」

「俺もいらないよ、里の皆の前ではそうもいかないだろうけどさ。俺も堅苦しいのは嫌いなんだ。背中、痒くってさ」

拓馬の言葉にあっけにとられていた湧祥は、突然吹き出し、笑いだした。その様に、拓馬もつられて笑みが零れる。

「わかったよ、拓馬。一緒に、犯人の正体を暴こう」

「ここなら人は滅多に来ないと、湧祥は丘の上の石に腰かけて語り出す。

「なんで会議の場で全てを話さなかったかは、大体想像がつく。昨夜俺が見せた、客神派の刺客の血を引きずり出して殺した技、拓馬の見た殺人犯も使ってたんだろう？ だから言えなかった。暗に澄水家ゆかりの者が犯人だといっているようなものだからな」

「いや、その通りだけど……よくわかったな」

「お前の友人の遺体の一つ、その技が使われた形跡はあったから。あの殺し方を可能にする玄英の技にはいくつか心当たりがあるけど、

場所が場所だしね。澄水者に疑いの目を向けさせるっていう線も無いわけじゃないけどね」

「あの技って、里の誰でも使えるようなモノなのか？」

「いや、距離にも左右されるけど、『水衝み』で相手の血液を引きずりだせる人間は、里に限れば両手で足りるくらいだ」

「みずく……なんだって？」

「ミズククミ。俺たちの力を表す尺度、って言ったらいいのかな」

言って湧祥は眼下の川に掌をかざす。すると川の水の一部が、丘の上に向かって飛んできた。湧祥はそれを、掌の上で球状に変える。見れば見るほど不思議な力だ、と拓馬は思う。

「水には様々な神が宿る」

「は？」

「まあ聞きなつて。川の神、海の神、雨の神、雨を止める神だっている。どれも人間が勝手に思っていることだけだね。ともかく、全ての水に神は宿る。俺たちが力を使えるのは、それらの神から、いわば“水の所有権”を一時的に借り受けることができるから。科学的な諸々を一切無視するなら、そういうことになる」

手の中の水球は、湧祥の言葉に応えるように、うねりながら宙を踊る。

「当然、借り受けられる量、距離、種類、強度は一人一人異なる。

触れてないと無理、10kgを超えると無理、水は操れるけど濃硫酸は無理、とかね。液体なら何でも、っていう玄英は、里じゃ少数派だ。それら力の特徴をまとめて、俺たちは水衝みって呼んでる。オーケー？」

「うん、何となく分かった」

「最後に強度の話。一般的、といっても里の中だけだけど、“誰かのモノ”になっっている水ほど、水衝みで操ることが難しいとされる。川の水は、誰のものでもないから易い、血はその人の生命そのものだから、借り受けるのはとても難しい。それを借りて ほぼ強奪だけど、血を刃に変えて敵を討つのが、澄水の秘奥。つまり、強度は筋力ってとこかな。他人の所有物を、無理矢理ひったくる力だ。

中にはどんな水だろうと、どんなに離れていようと、どれほどの量でも、っていう規格外もいるけどね」

「それがお前？」

次期当主だし、弱いなんてことは無いだろう そう思った。だが拓馬の問いに「自分で言わないよ」と湧祥は苦笑する。

「まさか。確かに澄水は玄英の血濃く強力な家系だけど、俺の水衝みは全然広くない。歴代最弱だよ、きつと。昔はそのせいで相当しごかれたね、タハハ。けど……」

湧祥の手にある水球が、瞬く間に小さくなる。一瞬水が水でいられる限界を超えて氷に変化したように見えたが、それすらも砕いて小さく小さく細く。拳程度の大きさだった水球は、細い針のように変わっていた。

「俺は『距離』　短所を埋めるのを止めて、マシなほうだった『強度』を鍛えることにしたんだ。それでなんとか、跡目候補の単位は取れたってところかな。一点突破型、万歳だね。その点、俺の弟は万能で優秀だった」

「その弟さんは？」

「死んだよ、跡目争いに巻き込まれて」

悲しみを滲ませて笑う湧祥。これで落第寸前なら、歴代の澄水の当主は、湧祥の弟は、如何ほどであったのか。拓馬は少し怖くなる。

「で、話を元に戻すと、血を操って敵の身体を喰い破る技は、澄水の流派なんだけど、使えるのは澄水に限らず……」

この日、湧祥の水衝みと、技の説明に数時間を要し、辺りは暗闇に包まれ、その場はお開きとなった。

だが、拓馬が昼まで感じていた疲労はどこかへ吹き飛んでいた。

それはきつと、今まで自分に縁の無い世界に、味方が一人現れたことと無関係ではないようだった。

第十話 凶つ星、鬼の瞳・一

己が生きている意味、己に与えられた役割　その全てを、汀麗は理解しているつもりだった。

汀家に与えられる役割は、宗家澄水の当主、跡目を守ること。

汀に生まれた麗は、幼少よりその厳然なる“掟”を叩きこまれて生きてきた。ゆえに麗は汀の本分を忘れぬし、疑問を持つことなどなかった。才能の無さを罵られても、水衞みの稽古で負け続けても、麗は己が確と決めた道を歪めることはなかった。

だがそれは、生来の心の強さがそうさせたのではない。麗は恐れていた。自らに課せられた使命に疑問を持つ事を。自分は汀の娘。役目を放棄するなら、生きる価値など無いと。

嫌だと思ったことは、数えきれないほどある。血豆が潰れてもなお終わりの見えない稽古に嫌気がさして、全てを放り出して、逃げてしまおうかと考えたことなど、数えきれないほどだ。

その度に麗を思いとどまらせるのは、後ろ向きな恐怖。“汀は澄水の為に生き、そして死ぬ”という、己の中で決して覆らない不文律。己が何者でもなくなるという怖れ。自らが汀麗であるために、少ない才を絞り出し、「汀家の娘である自分」に必死にすがりつこうとする、自縄自縛。

そして、弱い自分を見捨てることなく、いつか立派な宗家の護り刀になると、信じ続けてくれた両親。その期待に応えんとする意志だがそれも、当時の麗にとっては重荷でしかなかった。

汀の役目、才無き己　麗は数々の重圧に、押し潰されかけていた。

あの日、自分よりも辛く厳しい稽古をこなす、宗家の少年に出会うまでは。

渥美村には、里を治める玄英の衆が存在する。国内の玄英が『約誓の領』という機関　経済力であれ武力であれ、力持つ者たちによつて統治されているように、村という狭い社会においてもそれは同様であつた。

十花不語仙。それが渥美村を支配する者たち。名の通り、優れた水の玄英を輩出する十の名家。

無論、彼らは表立って村を支配しているわけではない。公的な里の行政を執り行う最高責任者は、渥美村村長である汀家当主、清一郎である。

渥美が玄英の棲む村であることは公にはされていないとはいえ、村は外界と完全に隔絶した閉鎖空間ではないのだ。名家の出とはいえ、それだけで村の政に関わる職に就けるわけではない。しかるべき国家試験をパスすることが求められるのは、一般人と変わらない。

もちろん、市井と変わらぬ振る舞いが求められるのは、“表”の事。彼らの本領ではない。

「約誓の領より使いが来て今日で三日……返答次第では『軍』を里に寄越すと言ってきている。だが、“蜘蛛”の行方はようとして知れず、事件を嗅ぎつけた客神派までが揺さぶりを強めている始末」

湧祥は周囲の玄英 集まった十花不語仙の面々を見渡し、重々しく口を開く。

“蜘蛛”とは、里の聖域、変若水の滝で殺しをはたらいた玄英に与えた仇名である。

「今、里は揺れている。特に、大きな力を持たない者たちは、約誓の領の介入を恐れている。“十年前”の再現になるのではないか、とな」

十年前、の言葉に湧祥を除く九の影がゆれる。各々、その意味を噛み締めているようだった。

「約誓の領と衝突すれば、人死には免れない。それだけは何としても避けねばならない。その為に、十花の協力が必要不可欠となる。

“蜘蛛”の搜索範囲を広げ、里の周辺一帯を風潰しに捜す。下手人が里に居ないと判れば、約誓の領も大きく出れまい」

「なるほど、湧祥様の仰りたいことは判りました。早速、家の若衆らに捜させましょう。」

湧祥の言にいち早く答えたのは、手足の長い瘦せぎすの男。瘦身から紡ぎだされる言葉はか細く高いが、不思議とよく通る声音であった。

「ですが一つ、気になる事が」

「なんだ、言ってみろ、麓杜」

湧祥の言葉に、けたけたと笑う麓杜という男。長い手足を折りたたむのが億劫だと言いたげに正座の姿勢をやや崩す。見た目の印象だけで語るなら、この場において“蜘蛛”と呼ぶに最も相応しいのは彼だった。

「先日、里に侵入した客神派と思しき賊を撃退されたそうですね、湧祥様」

「そうだが、それがどうした」

「聞けば、外部から拉致同然に呼びつけた一般人を危険に晒したとか」

さすがに耳が早い、と湧祥は齒噛みした。

「汀の娘を警護につけておきながら……少々ツメが甘いのはありませんかな？」

約誓の領十一家において六番目の序列にあり、「一にして万の軍勢」と誉れ高い澄水家も、里で絶対的な権力を敷いているわけではない。その証左が、十花不語仙という統治体制。絶対的な武力で支配できるほど、澄水家は強くない。他家が弱くない、と言い換えてもよいが。

「何が言いたい、瀬田麓杜」

「責任問題だと言っているのですよ、湧祥様。我々は盲目的に貴方

がたを信奉しているわけではない。担ぐ御輿は、選ばせていただきたいものですな」

「さつきから黙って聞いていれば」

麓杜の糾弾に、一人の男が唸るように声をあげた。麓杜とは対照的に、筋肉で鎧った、見るからに強靱で2メートルはあるうかといふ巨軀。

「仮にも未来の主に向かって吐く言葉じゃねえな、オイ」

「浦辺の御当主は頭が足りていないようですな。それとも聞こえませんでしたか？ 御輿を担ぐかどうかは、我々が決めると申したのです」

「湧祥を認めねえってか」

「そうは言いません。ただ、火を呼びこんだからには、火消しは其方が負うべき責任かと」

どういう意味だ、と場の視線が麓杜へと集中する。

「先程、我等の網に客神派と思われる一団がかかりました。彼奴らは真っ直ぐ、我等の里に向かっていているようですよ。敵意を隠そうともせず。目的は想像でしかありませんが……報復、ではありませんせんかな？」

「だからどうした。奴等はウチの作次を殺りやがったんだぞ。それを報復だと」

「里に危害を加える者には例外なく死を　それは澄水の理屈でしょう。もつと角の立たないやり方をしていたきたい」

「だから、客神派を追い返すのに手を貸す気はないと」

「当然でしょう」

睨みあう大男、浦辺と瀬田麓杜。巨体と瘦身、両者から威圧の気が膨れ上がる。それは針で突けば瞬時に弾ける風船のようで。

「いいかげんにしてくれ」

しかし、そこへ横から諫めの声が投げられた。「權」と湧祥は声の主を呼ぶ。

「いがみ合っている場合じゃないだろう。事が長引いて困るのは、澄水も温海も同じはずだ。十花全体が協力しなくてどうする」

声の主の名は、温海權。湧祥の幼馴染で、温海家の若き当主である。

「では權様、澄水の尻拭いに我々温海の民を危険に晒せと？」

「そうじゃない、俺は戦える人間が戦うべきだと言ってるんだ。第一、湧祥の所為で今回の侵攻が起こったと決まったわけでは……」

「そこまでだ」

終わる気配の無い論戦を湧祥は止めた。そも、麓杜は己の意見を曲げるつもりが無いのだ。それは彼が仕える權の意見に異を唱えて

いることから明らかだった。「しかし」となおも食い下がる權を
手で制して告げる。

「麓杜の言うことはもつともだ。今度の件は、澄水が片付ける。」

「里に侵攻する客神派の真意、見極める必要がある。害意があるの
なら」

「澄水の掟のもと、斬り伏せる」

第十一話 凶つ星、鬼の瞳・二

拓馬はその時、村の小さな斎場にいた。客神派の襲撃で命を落とした、作次の神葬祭である。

神道の葬儀は神職が執り行うもののように、斎主は水守透子の父がつとめていると、隣に立つ汀麗が教えてくれた。

無論、何の準備もない拓馬は葬儀に参加できるはずもなく、葬儀場の外にただ佇み、流れてくる偲びの唄を聞くことしかできなかった。

それでも葬儀場へやってきたのは、作次は死に、自分が生き残ったことの後ろめたさ。自分がいても何もできなかったという無念を、少しでも晴らすことができたなら……そう考えての訪問だった。

ほんの数分、言葉を交わしただけの相手。刺客と勘違いして取り組みあつた自分を鷹揚に笑って許してくれた作次。あの一瞬だけでも、彼が人情に篤い人柄であつたことは、想像に難くない。彼の死を悲しむ者が多かるうことも。

彼の死に涙する親類縁者。客神派への怒りに震える村の青年団の男たち。“その場”に立ちあつた透子も沈痛な面持ちで斎場を訪れていた。

そんな村の皆の反応を見れば見る程、拓馬は自分が部外者であることを自覚してゆく。

彼の死を真実悲しんでいる者を見れば見る程、押し掛かる他者の

死　その重みを軽くしたいがためだけに来た自分に嫌悪感が募つてゆく。

眼前で人が死ぬのはこれで二度目。だが今回は友人ではなく、赤の他人のようなもの。それだけで自分はこつも冷たくなれるのかと、拓馬の心には自責を越えて呆れが混じる。

「やっぱり、来ないほうがよかつたんじゃない？」

そんな拓馬を見て、麗は気遣わしげな表情で声を掛ける。

「そういうお前こそ、何で俺についてきてんだよ」

「対象を守らない護衛がどこの世界にいるのよ……今度はどこかにフラフラ出歩かないでよね」

湧祥の話では、汀家は昔から要人警護の任を請け負う家柄で、麗も拓馬の警護の任に就いているとのことだった。もつとも、麗が拓馬の護衛であることは麗の父、清一郎が詫びを入れた件で気付いてはいたが。

「悪かつたよ。これからは勝手に動いたりしないから」

ともかくも、あの夜屋敷を抜け出したことを詫びる。麗本人も、護衛対象を見失ったのは失態だと感じているのか、出会った時のような偉そうな態度を見せることは無かつた。いつもの調子ではないのだろう、言葉も歯切れが悪い。

「べ、別に謝ってほしいわけじゃ……アレは私の注意不足なんだし」

そこまで言つて、平素のペースを取り戻すべく、麗は大きく咳払いをして拓馬に相対する。

「私は本来なら湧祥様の護衛なんだから、あんまり私の手を煩わせないですよ」

「湧祥の？」

正直、拓馬にとっては意外な話だった。湧祥の凄まじい“殺しっぷり”を見ているだけに、目の前の、下手をすると小学生でも通りそうな小柄な少女が、彼の護衛だとは到底思えなかった。

「……何よ。信じてないの？」

そんな拓馬の心の内を察したのか、麗は弁解じみた言葉を並べる。

「言つとくけどね、汀家は由緒正しい宗家の護剣なのよ。そりゃあ私は歴代でも弱っちいほうだし、細水もろくに振れないし、出廻らしとか言われてるけど、それでも湧祥様の一番の護衛なんだから」

フォロードころか、墓穴を掘っているようにしか聞こえなかったが。

「わかったわかった。とりあえずお前が、湧祥大好きってのは、よく分かったよ」

「んなつ」

拓馬の言葉に麗は耳まで真っ赤に染まる。うろたえる麗を見ると、愛嬌のある可愛い小動物という印象しか懐けない。もう既にマレビ

トの存在に慣れてしまったのか、初めて出会った時の得体のしれない感じは皆無だった。

「あああなた、何言って。それにいつの間に、湧祥様を呼び捨て……！」

鬱々とした気分が少し晴れたことに感謝して、茹でダコのようになった麗の追及を、拓馬は甘んじて受けた。

「十花不語仙？」

麗の話では湧祥が幹部会から戻るのは早く夕方ということらしい。拓馬はその間に、里のあれこれを麗に聞いてみることにした。湧祥から聞いたことだけではなく、複数の視点から里の実態を把握しておきたいと思ったからだ。

「そう。それが今湧祥様の列席している幹部会の名前。単に十花と呼ぶ人のほうが多いけれど」

話題は、村の最高幹部“十花”について。麗の話では、玄英に関する諸問題に対する、村の最高意思決定機関らしい。澄水、汀、佐志、氷室、垂氷、浦辺、瀬田、秋津、泉水、そして温海。十の名家からなる幹部会。その実力は折紙つきで、武闘派の家の実力は伯仲しているという。

確かに、先日の湧祥の戦いぶりを見れば、それは納得できるとい

うものだ。むしろ、湧祥に匹敵する玄英たちが何人もいるということに拓馬は驚いていた。

しかし、麗の説明に拓馬は一つの疑問を持つ。

「でもさ、澄水家もその十花の一つってことは、澄水家は他の家と同列ってこと？ 村を統治しているのは澄水家じゃないんだ？」

「それは……色んな意味で言いづらいんだけど」

麗は一瞬、口にするのをためらったようだったが、「どうせすぐ気付くでしょうし」と結局説明してくれた。

「この里はね、大きく分けて二派に分かれているの。一つは私たち澄水とその分家筋。こちらが里の実質的な支配者側」

支配、とは穏やかではないが、実際そうなのだろう。今の麗の言葉には、気負いも驕りも感じ取れない。ただ事実を語っている。そんな印象を受けた。

「もう一つは温海家。遙か昔、この地を治めていたと伝えられる一族。澄水と温海、この両家は反目しあっている。ずっとずっと昔から憎みあっていると云ってもいい」

暗殺など、日常茶飯事なほど、そう麗は言った。里の旧支配者である温海と、それを武力で捻じ伏せて新たな支配者となった澄水。渥美村 拓馬はようやく、この村の名前の意味を悟った。

そして一つの可能性に気付く。

「じゃあ、跡目争いで死んだっていう湧祥の弟って……」

跡目争いと言うからには、澄水の内部分裂が原因だと、拓馬は思い込んでいた。だが、澄水家に明確な対立の意思を示している勢力があるなら話は別だ。対立派閥の有力な次期首領。かつて日常茶飯事だったというなら、暗殺を目論んでも不思議ではない。

拓馬の問いに、麗は首を振る。だがそれは、否定の意味ではなかった。

「それは分からない。でも、湧祥様の御弟君である立清様たしせいは、歴代最強と噂されるほどの腕前だった。たとえ不意をついたとしても、立清様の命を狙える者なんて……いえ、それ以前に立清様はそんな隙を見せるような御方じゃなかった」

けれど証拠が無かった、と麗は悔しさを滲ませて言う。

「そして湧祥様は、最後に残った澄水直系の男子。加えて当主の継承式は目前。これで分かったでしょ？ 里は今、とても不安定な時期なの」

対立する十花、圧力を強める約誓の領、内憂外患とはこのことか。拓馬は湧祥が抱える荷の重さを思い眩暈をおぼえた。

その時、

「おーおー。お前が湧祥以外の男といるたあな。アレか、湧祥様は卒業かあ？」

畦道の向こうから麗に声を投げる男がいた。その男に、拓馬は見

覚えがあつた。汀家の屋敷に居た、見るからにガラの悪い男。

「威！」

麗が、その男の名を呼んだ。

「十花の会議はどうなったの。こんなに早く終わるはずないでしょ。どうせ瀬田のひよろくだまの御小言が嫌で……」

「ああ、そのことなんだけだよ。喜べよ、久方ぶりの、戦争だ」

「……どういうこと？」

男の嬉々とした言葉に、麗は逆に凍りつく。その様を、男は低く唸って嘲り笑う。

「そのひよろくだまが、ほざいたんだよ。客神派が里に迫ってる、手前から対処しろってな。緊急招集だ。お前はまず、隣の小僧を連れて屋敷に戻りな。お楽しみは、それからだ」

凶暴な面を隠そうともせず、獣じみた舌舐めずりとともに、男は笑う。

戦争。そう男は言った。

自分がありきたりの青春を送っていたその裏で、未だ教科書にもたいした記述のない玄英そのたちが繰り広げていた殺し合い。その根の深さに、拓馬は今更ながらに身震いした。

第十二話 凶つ星、鬼の瞳・三

里に迫る客神派の一团を迎え撃つのは、澄水派の玄英二十名。瀬田麓杜から齎された情報を信じるなら、敵の陣容は五十数名の玄英と、無能力の人間が百あまり。目的の知れない特殊能力者たちが大挙して里に接近している。紛れもない非常事態であった。

澄水に属する玄英全てに緊急招集がかけられ、麗の迎えをチンピラ風の男 佐志威が買って出たということらしい。今は澄水の屋敷に向かっている最中である。

「八、肩透かしもいいとこだぜ。ウチも舐められたもんだよなア」

「……？」

早足で歩きつつ、威は吐き捨てる。その態度の意味が、拓馬には理解できなかつた。

麗はそんな拓馬を見て説明する。

「数が少ないっていつてるのよ、あいつは。確かに、里に攻め込むつもりなら、寡勢と言わざるを得ないけど」

麗の言葉に拓馬は驚く。総勢百五十 なるほど確かに、軍勢と呼ぶにはいささか少ない。しかし、このような事態に無縁だった拓馬にとっては、百五十は多すぎる気がした。

だが、約誓の領に名を連ねる玄英の里に、百かそこらで侵攻するのは愚拳の極みだと麗は言う。

そもそも約誓の領とは他家に認められてとか、単純な武力で選ばれるモノではない。

遙か昔、約誓の領などという枠が無かった時代。“表”が太平の世であるうと、群雄割拠の乱世であるうと、玄英はその“裏”で血みどろの戦を続けていた。無論それに表の思惑が絡むこともあったが。

約誓の領とは、そんな血で血を洗う時代を経て生き残った猛者。それらが各地の玄英を治めていくなかで自然とできたもの。かつては無名だった者たちも、数多の戦を経、敵を屠り、その名を揺るぎない畏怖の象徴とした。そうした抗争の末には、力の拮抗した“王”が残る。一度ぶつかれば、双方無事ではすまない。互いがそう確信できる雄が並び立つ。それが、乱世の終結だった。

名高き強き家を十一選んだのではなく、十一の圧倒的な力を持った者が『約誓の領』という組織を、制度を、創ったのだ。十一という数字に特別な意味は無く、約誓の領には零落した家など必要ない。十一が十、九と減っていくのみである。

故に、約誓の領は揺るがない、“揺らいではならない”。名が強さを保障しているのではない、他の追随を許さぬ強さが、約誓の領の名を保障しているのだ。

過去、約誓の領と事を構えた玄英の家は尽く潰されたが、その際に攻め込んだ人数は千を下らないという。

百そこらで里にやってくるということは、攻める気が無いか、よほどの策があるか、己の力に自信があるかだと麗は言う。

「でも、肩透かしと言つわりには、随分とうれしそうね、威」

「そりゃあな。俺は温海のヘタレ共と違って、稽古じゃ満足できねえんだよ。血が吸いたくてたまんねえのさ」

威は犬齒を剥いて嗤う。その様に拓馬は不快感を隠せない。迫る殺し合いに思いを馳せて笑うなど、享楽で人を殺すのと何ら変わらない。それこそ、友人たちを殺した“鬼”のような

「よお小僧、とんだ災難だったな」

そんな嫌悪の視線に気付いたのか、威は初めて、拓馬に声をかける。

「こんな何も無い田舎に連れてこられて、挙句にコレ。どこの戦国時代だよ、なあ。まあメシだきや上手いところだから、汀の家で麗とのんびりしてな」

「はあ……」

「そっぴゃお前、昨日湧祥と長いことだべってたそっぴゃねえか」

「それが、何か？」

拓馬には、この威という男の意図がまるで掴めなかった。威は拓馬と会話しているようで、拓馬自身を見ていない。拓馬を介して、“別の何か”を見ているような……

「お前は、湧祥あいつが怖かねえのかよ？」

「それは、どういう意味です」

「ハッ、これは重症だなあ。人死にはもう慣れたか、よく考えてもみるよ、あいつが……」

「威！」

麗が制止するが威は聞かない。

「手前のダチを殺った“蜘蛛”かもしんねえんだぜ？」

「それは……」

「お前の口を封じる機会を、狙ってるかもしれない。よくそんな相手で喋ってられるな」

考えていなかったわけでもないし、今でも考慮の外だったかと問われれば、それは嘘だ。湧祥が、拓馬に里の状況全てを伝えてくれないことは、麗から聞いた話からでも明らかだったし、村の幹部会を差し置いて事件の目撃者と二人きりで調査するという事態も少々おかしい話である。まるで近くに犯人がいるとでも言わんばかりな、あるいは湧祥自身が“そう”なのか。

そんな考えを、拓馬は否定する。

湧祥を信じる。そう決めた理由は、村を見渡せる丘で彼が語った里への思い。「里の平穏を守りたい」という力強い言葉。

「なあ、教えてくれよ。お前は湧祥を信じてんのか、それとも殺さ

れるかもしれないって腹括って付き合ってたのか……。俺の知ってる湧祥あいつは、そんなホイホイ他人を騙せるヤツじゃないはずなんだがな

そこまで聞いて、拓馬は懐いていた違和感の正体に気付く。この男は自分を知りたいのではない、自分を通して、湧祥の人となりを知ろうとしているのだと。麗の迎えを引き受けたのも、共にいる自分から湧祥の情報を得ようとしたのだと、拓馬は得心した。

「威、湧祥様への侮辱もそこまでにしときなさいよ。それ以上は、わたしが許さない」

「お前もか、麗。何かあれば湧祥様湧祥様ってよお」

麗の怒気にも威は全く怯まない。むしろ心地よさそうですらある。

「お前らにはアイツが何に見えてんのか。俺に言わせりゃ、アイツは鬼だ」

「威！ あなたは人のことを言えるほど……！」

“鬼”の一言に拓馬が凍りつき、麗の怒りが頂点に達しようとしたとき、澄水の屋敷の方角から重低音が響いてきた。大気を震わせ、腹の底を揺さぶる、この大音は

「あれは、宗家出陣の号砲……湧祥様……」

気を削がれた麗が呟く。低く鈍い大砲の音に続いて、男たちの野太い声。

「チツ、出遅れたか」

独り言つ威は、言葉とは裏腹に全く悔しそうではない。

宗家、澄水出陣　その言葉に、拓馬は客神派らしき刺客を討つた湧祥の姿を思い浮かべる。湧祥は鬼だと、佐志威は言った。確かに、凄まじい怒気を放ち刺客を屠ったあの時の彼は鬼と形容するに相応しい。あるいはそれが、彼の本性なのだろうか……？

拓馬はそこで、あることに気付く。自分は、澄水湧祥という個人のことを、何も知らないのだと。玄英の技、里の仕組みばかりが目がいって、“人”を見ることを疎かにしていたことに、気付いた。

気付いて、ならばどうすればいい。彼の、彼をとりまく者たちの人となりを判断するには

そうして拓馬は、人知れず、ある決意を固めていた。

第十三話 凶つ星、鬼の瞳・四

轟々と鳴り響く砲の音。物々しい轟音が、里全体に鈺する。他家の襲来に際して、空砲を空に撃つのは澄水家の慣習である。出陣の号砲響く空を、湧祥はひとり見上げていた。

戦いが始まる。澄水の跡目となる前から玄英との戦闘はしばしばあったが、正規の出陣は今回が初めて。つまり、里の人間にとつては、これが総領息子の初陣である。

瀬田麓杜より伝えられた客神派襲撃の報は、澄水の調査によって真実であることが裏付けられた。

渥美村の十花はそれぞれ、他の追隨を許さぬ長所がある。温海派十花、瀬田家の“売り”は緻密な情報網。彼らの“網”は里に害なす者の気配を逃さない。澄水の里が永きに渡り外敵を退けてこられたのは、彼等の力に拠るところも大きい。大きいのだが……

だからこそ、湧祥には理解しがたい部分があった。事の発端となった謎の玄英による一般人の惨殺事件。その現場は里の聖地、変若水の滝のすぐ近くであった。しかし、このとき瀬田の“網”に犯人がかかる事は無かった……と、報告を受けている。

瀬田の網は敵影を漏らさず捕捉するレーダーの類ではなく、水の玄英が持つ御業のひとつ。己に害なす意思を、水を介して読み取る読心術の一種である。故に、里ではなく一般人に向けられた殺意に、瀬田の網は機能しなかった。

そういうことになっていく。

このことは、澄水派の者らは誰も信じていない。渥美村を守ってきた瀬田の網は、これほど“ザル”であるはずがない、と。

里の聖域にほど近い場所で行われた犯行。それに里の玄英が全く気付けなかったこと。考えられる原因は二つ。

一つは瀬田が犯人の情報を握りつぶしている、つまり犯人は温海派の玄英ないし又は、温海派の息がかかった者である可能性。

もう一つは、想像するのも恐ろしいことだが、渥美村の玄英全てが捉えきれない程に、隠形に優れた玄英が存在すること。

湧祥が危惧しているのは、後者の可能性が濃厚だということだ。目撃者である拓馬を確保し手元に置いたのは犯人 “蜘蛛” による暗殺を防ぐためだ。

前者の可能性 惨殺事件の犯人が温海派ならば、これは愚策と言わざるを得ない。なぜなら玄英という閉じられた枠を外れた今回の事件は遠からず、人間との融和を図る外部勢力 約誓の領の介入を許すことになるからだ。里の権力闘争に、外部の干渉を招くことは得策ではないのだ。

そして、今回大きな動きを見せてきた客神派。彼らが大挙して里に攻め込むなどという事態は、客神派と国家、約誓の領の和解以来、起こらなかつたことだ。それは無論、澄水家以外の十一家でもだ。

澄水家を取り巻く状況は、自分たちが思うよりもずっと、悪い方向へ向かっているのではないか 湧祥はそう思えてならなかつた。

「よう湧祥。どうした、そんな浮かねえ顔して」

そんな湧祥の思考を断って、話しかけてきたのは身の丈2メートルの迫ろつかという大男。十花の会議で瀬田麓杜とやりあった男。澄水派の十花、浦辺一成である。

「初陣でびびってんのか？ そんなんじゃ温海の連中に笑われちまうぞ」

「そんなことはないよ、一成」

苦笑する湧祥に、浦辺は鷹揚な笑いで返す。

「ま、そうだな。お前さんの実力は折紙付き、恐れることは何もない。なあてめえら！」

最後の一言は浦辺家の若者衆に対するものだった。浦辺の檄に、集った玄英たちは声を揃えて吼える。

大雑把で、詰めが甘い。だが味方を鼓舞する術には長けている。戦闘において“剛”を担う者。それが湧祥の、浦辺一成に対する評価だった。

(見習わないとな、こういうところは)

澄水の屋敷に馳せ参じた者たちを放って、物思いに耽っていた己を心中で窘める。そして

「皆、よく来てくれた！」

呼び掛ける。部下に、同輩に、共に戦う仲間たちに。彼らを率いる将として。

「状況は分かっているな。里の宝を、変若水を狙う客神派の群れが、今も俺たちの里に迫っている。第一陣二十名は俺と共に、修練の野でこれを迎え撃つ」

修練の野とは、里の北側に位置する、文字通り、渥美村の玄英が修行の場とする開けた野原だ。

「知つての通り、浦辺作次は客神派の手によって命を落とした。多くは語るまい、だが皆、彼の死に思うところは必ずあるはずだ」

湧祥の言葉に、各々瞳に炎が宿る。猛り怒り、溢れ出す数多の怒気が場を震わせる。

それを見届けた湧祥は、懐から短刀を取り出す。その刃で、自らの掌を切り付けた。突然の自傷行為に、しかし皆の顔に動揺の色は無い。

これこそが、宗家出陣の合図だからだ。

傷ついた掌から滴り落ちる血の雫は集まり伸びて、紅い剣“細水”と成る。

湧祥はそれを天高く掲げ、吼える。

「弔い合戦だ！ 斬り裂いた敵の血で、里の麗水を紅く染めよう。それを以て、黄泉に揺盪う死者の魂を安んずる。各々、奮戦に期待する」

次の瞬間、益荒男どもの大音声が里に響き渡った。湧祥に倅い、刃を掲げ、敵を殺すと猛って吼える。

そして、掲げた細水を下した湧祥に、近づく人間が二人。老年のそれでいて老いを感じさせない筋骨隆々の男性。もう一人は長髪を風になびかせる妙齡の美女。

「なかなか、跡目の仕業が板に付いてきましたな、湧祥様」

「えらく立派になったもんだね、坊」

「じい、瑞名」

ともに澄水派の十花である。老人の名は氷室正剛。女性の名は垂氷瑞名。汀同様、澄水の分家筋にあたる者だ。

「一町先の水を操るにも苦勞なされた湧祥様、よくぞここまで。じいは嬉しゅう御座いますぞ。風の日も雪の日も、来る日も来る日も修行の毎日で……」

「また始まったよ、正剛さんの昔話」

「今は感慨に耽ってる時間は無いぞ、じい。俺はすぐに出陣する」

「それはそれは、若者は気が早くて、じじいはついていけません」

「それで、二人には頼みがあるんだが……」

正剛の軽口を半ば無視して、湧祥は二人に告げる。頼みとは、里

に迫る客神派への対応には当たらずに、澄水の屋敷、そして変若水の滝の警護することだった。

「なんと、湧祥様の初陣をこの目に焼き付けるのを余生唯一の楽しみにしていたじいに対して何たる仕打「それはいいんだけどさ、ちよつと警戒しすぎじゃないかい？」

正剛の恨み節に、瑞名が問いをかぶせる。敵の戦力が十分に把握できていない中、貴重な戦力である十花を守備にあたらせるのは愚策ではないか、と。

「もつともな意見だ。けれど、里に迫る集団が真実客神派なら、奴等の狙いは変若水と見て間違いは無いだろう？ 瀬田が捉えた一団が、陽動である可能性は捨てきれない」

瀬田が何か情報を隠匿している可能性もあるしな、と、こちらの言葉は胸の裡にしまう。

「それに、二人の力は拠点防衛向きだから」

「そういうことなら、引き受けてやらないでもないよ。湧祥の雄姿はお預けだね、正剛さん」

「これも策ならば、仕方ありませんな」

二人は納得して持ち場へ向かう。二人を見送り、湧祥は敵の迫る方角へと目を向ける。

そして思う。自分は、この場所において良いのかと。

宗家、惣領の初陣。本来ならば、今自分が立っている場所には、立清が居たはずなのだ。

『この里の、全て、澄水も温海もない、皆を守りたいんだ』

気負いも、臆面もなく、そう口にしていた立清。

業も、水衝みも、知武勇も、人を惹きつけるカリスマも……全てにおいて自分を遥かに超えていた立清。

己の半身、愚劣な兄とは似ても似つかない、優秀な双子の弟。

今の湧祥は、澄水の跡目として将来を嘱望されていた、立清の真似事をしているに過ぎない。

それでも、と湧祥は思う。それでも、弛まぬ努力と奮闘の果てに、いつか真実、“立清の代替”としてではなく、“澄水の頭領”として、皆に信頼される日が来るのではないかと。

(無理だね)

そんな希望を、湧祥の内の“もう一人”が否定する。戦場の血風に酔い痴れる化物風情が、何をほざくのかと。

ずっと只の影であれば良かったのだ。日向に立つ立清の後に隠れて、鬼は鬼らしく生きていれば良かったのだと。

だが、今の湧祥に選択肢は無い。立清を失った今、

(大丈夫、俺はやれる。俺が、叶えるんだ。立清の夢を。權の、透

子様の、そして……)

折れそうになる心を鼓舞し、澄水湧祥は出陣する。

晴れ渡っていき空は俄かに曇り出し、暗く沈む空は烈しい雨を予感させた。

第十四話 凶つ星、鬼の瞳・五

人気の無い山道を征く、湧祥率いる第一陣。周囲を警戒しつつ、着実に歩を進める。戦地へ赴く彼らを見送る者と時折すれ違ふ以外、人影は見当たらない。

里に迫る集団の動きは決して早くなく、また迎え撃てと言わんばかりに直線的である。陽動か、あるいは挑発か。

だが、敵が真つ向勝負を狙っているならありがたい。澄水、とりわけ湧祥の能力は搦め手には向かず、正面衝突にこそ、その真価を發揮する。挑発であれ陽動であれ、乗らない手は無い。そのために、里の要所には十花をはじめとした手練を配備させているのだから。

徒で進む湧祥たちの前に、走って向かってくる人影が三つ。

出陣に遅れる事十数分、拓馬、麗、威の一行が湧祥に追いついたのだ。正確には、出陣の号砲を聞いて進路変更、威の案内で、合流できるよう山道を逆に来たのだが。

「湧祥様、私も共に、参ります！」

挨拶もそこそこに、戦場へ付き従いゆくことを願う麗。だが湧祥はそれに否と言ふ。

「駄目だ。お前の今の任は、拓馬の警護。お前は汀の屋敷で待機だ。わかつているだろう」

「ですが、私は汀の……」

なお食い下がる麗を、湧祥は厳しく、

「ならん。お前は拓馬を守れ。これは、命令だ」

そして次いで優しく諭す。

「そう怖い顔をせずとも良い。誰が相手であろうとも俺は死なぬし、仲間もこれ以上死なせん。心配するなよ」

「……承知、致しました」

しかし、承服しつつも麗は渋い顔だ。自分が言いたいののは、そういうことではないと、伝えたきを伝えきれないもどかしさを滲ませているように、拓馬には思えた。そして……

「威」

「あーいよ」

威には一言。それで十分と言わんばかりだ。

「待ちわびたぜ、この時をよ」

言って、舌なめずりする威の獣じみた眼が湧祥を捕えて離さないのを、麗は見逃さなかった。

出陣より数刻、湧祥らは会敵予想地点である修練の野に到着していた。敵戦力は玄英五十を含む百五十。それを迎撃する渥美村の陣容は、湧祥、浦辺一成、佐志威ら十花をはじめとする澄水派の玄英二十一名。

最早、斥候の報告を聞くまでもない。明確な敵意をもって此方に迫る一団の気配は、ひしひしと感じ取れる距離にまで縮まっている。周辺に違和感を撒き散らす独特の存在感　相手方も感じ取っているだろう、世の理を捻じ曲げ、不思議を現出させる妖術の起こりを。

それでも、敵は進路を変更することはない。真っ直ぐに、愚直と言える程に直線的に、湧祥らの待ち受ける野へとやって来る。

(だとするとこれは陽動……いや、結論を出すのは早いかな)

思い湧祥は気を引き締める。陽動だろうとなかろうと、戦闘になるならば為すべきは一つ。敵を一人残らず撃滅すること。

しかし湧祥には別の思惑もあった。作次を殺した客神派の刺客、その一人を生かして逃がしたのもそのためだったのだが。

それは即ち、局面の活性化を図ったもの。澄水の立場を危ういものとした一般人の殺害。その事件に客神派が絡んでいるのであれば、必ず動きを見せるはずであると湧祥は踏んでいた。この騒動に乗じた、以前とは異なる動きを見せるはずだと。

己が窮地に立たされているときこそ、敵の姿は鮮明に見える。湧祥はそう考えていた。果たして、客神派はかつてない行動に出た。客神派は以前から　それこそ玄英紛争勃発当初、つまり組織結成

から間もない時から　澄水が秘める宝に並々ならぬ関心を寄せ、ソレの提供を求めていた。ときには、今回のように刺客を放ち強引な手段に訴えたこともある。

だが今回は違う。完全な確証は無いとはいえ、客神派が軍勢を率いて里に攻め込もうとしているのだ。客神派が結成されて六十年、斯様な事態は湧祥が知る限り初めてである。

つまり、これは事件に客神派が関わっているという何よりの

(いや、それもまた早計か)

結論を出すには、まだ情報が少なすぎる。下っ端であろう刺客を敢えて生かし、より有益な情報を持つ者を釣り上げ、生け捕りにする。それが湧祥の描いた図の一つである。

(思えば、俺たちは里の中で“完結”することに、こだわりすぎたかもしれないな)

旧来の澄水の方針である“相互不干渉”が、今回は仇となっている。ソレが通用したのは、澄水が他の追隨を許さぬ武力を持ちえた時代に限る。

約誓の領の関係者から少し事情を聞くか、とまっていると、

「来たぜ湧祥」

一成の言葉が湧祥を現実へ一瞬で引き戻す。

前方を見やる。木々の隙間より滲み出るように現れる黒い影、影、

影

出で立ちだけなら一般人と区別がつかないような男から、全身黒ずくめの異様な男まで、現れた集団は、その外見に統一感はない。

共通するのは、外界に対して振りまく違和感。世の異様を体現する玄英が纏う、不安定感。玄英が異能を発揮する前段階に起きる現象である。

それを、玄英が世の理から外れた異界より来た“神”である何よりの証拠であると、声高に主張しているのが客神派である。

その彼らのいうところの客人神が、異能の気配を振り撒いて現れる。

その影の中の一つ、背を丸めた全身黒ずくめの小男が、軍勢に先じて前に出る。渥美村の玄英の先頭に立つ湧祥と、十数メートルの位置で立ち止まる。数瞬の睨み合いの後、黒い小男が口を開く。

「お初にお目にかかる、私は馳来虎。貴方がたの言う、客神派のマレビトで御座います」

男は自ら、客神派を名乗った。探りを入れる手間が省ける。

口調は思いの外に穏やかであったが、その背から滲みだす迫力は決して並ではない。溢れ出る怒りと憎しみを隠し切れていない。むしろ、その丁寧な言葉は憎悪を抑え込む手段かもしれない。

「先日は、我らの同志が世話になったそうで」

「随分と素直に素性を明かしたな、畜生風情が」

馳と名乗った男は、湧祥の物言いに眉を顰める。

「畜生とはまた随分な……。聞けば里に“交渉”に参った同志に同じことを申されたそうで。なるほど、森羅の鬼神から見れば、我々など地を這う獣と変わらぬというわけですか。その驕り、いやはや恐ろしい」

「御託はいい。目的は一体なんだ。先に言っておくが、貴様らが何人で押し寄せようと、我らの宝は渡さぬ」

「ほう、それは残念」

「俺たちは、俺たちの仲間を傷つける輩に容赦はしない。いい加減、理解したらどうだ。大人しく帰るなら、命は取らん」

「そうもいかぬ事情がこちらにもありまして……」

瞬時、膨れ上がる闘気。戦闘の馳から伝播するように、殺意が百を超える敵から渦巻く。

それを受け、澄水の白の和装、客神派の黒装束、両軍が一瞬の内に戦闘態勢へと移行する。

そんな中、湧祥のみが涼しい顔を崩さずにいたのだが……

「学習しないな、分かっているのか？ 俺の眼前に立っている時点で、貴様らは」

「死地にあると？ なるほど確かに。一睨みで命を摘み取る鬼神の瞳、約誓の領が誇る客神の御業、是非ともこの目に焼き付けたい……」

馳はくつと笑い、眩き、消える。

「！」

否、消えたのではない。地を蹴り、人間では為し得ないほどの速度で、湧祥に飛びかかったのだ。

「できるものならば、ね」

「湧祥！」

一成の叫びは遅きに失した。瞬きの間に、湧祥の眼前に現れた馳。その手には鈍く光る鉤手甲。その爪が湧祥の頸に迫り

第十五話 凶つ瞳、鬼の瞳・六

完全に虚を突いた襲撃。一瞬 文字通りの一瞬で十数メートルの距離をゼロにして右の懐に潜りこんだ馳を、常人の眼が捉えられないはずがない。そこから繰り出される凶刃はまさに必殺と言ってよいものであったが。

放たれた頸部への一撃はしかし、その爪が届く直前、地より伸びた“何か”によって阻まれる。

馳の鉤手甲は、湧祥の頸まであと三寸、というところで止まっていた。馳の鋼爪を阻んだのは、湧祥の足元から伸びた、どす黒い赤の針。その幾本かが鉤手甲の爪の間に伸び、馳の攻撃を止めていた。敵手の虚に乗じた渾身の一撃も、防がれれば隙の大きいだけの技に墮する。湧祥にとっては反撃の好機であったが、馳がそれを許さない。防がれたと見るや、一拍も置かずに後方へ飛び退く。それを湧祥は黙して見送った。

「てめえ！」

不意の一撃に対応できなかった自分と、敵に対する怒りを等分に混ぜ、一成が猛る。

だがそれを「早まるな」と湧祥が制する。その様子を見届けて、

「流石、良い眼をお持ちのようだ」

湧祥を見、退いた馳が声を投げる。先の折衝で怖れを懐いた様子

は無く、いたって自然体のままである。そんな馳に、湧祥も会話に
応じる。

「今の地走り、もしや“鹿喰”の者か」

「御明察。今代より三つ前……三十三代目の弟こそ我が曾祖父」

鹿喰とは、約誓の領に名を連ねる玄英の一つである。酋帥格第六
席 序列としては末席にあたるが、それは決して“弱い”という
意味を持つものではない。他を寄せ付けぬ強さこそが約誓の領たる
唯一の証なのだから。

鹿喰 彼らの玄英としての特徴は、人間離れした身のこなし。
鳥獣の如く地を駆け空を舞い、時には水中を眼にも止まらぬ速さで
泳ぐという。知られているはその程度。澄水に比べ、その異能は
知られていない、謎の多い名家である。

かつての当主の弟を曾祖父に持つ。馳の言が真実なら、今眼の前
にいる男は本来ならそれなりの地位にあつてしかるべき人材である。
事実、先程の疾走には玄英の能力以上のもの、熟達した戦士の気迫
を湧祥は感じ取っていた。湧祥の勘は告げる この馳来虎という
男、歴戦の手練に相違ないと。私怨に眼が曇り、命を投げ捨てるよ
うな愚拳を犯す者ではないはずだ、と。

そう判断したからこそその疑問を、湧祥は速攻を避け、馳に話を聞
いてみることにした。

「しかし意外だ。宗家にほど近い筋の者が、何故客神派などに身を
置くのか。そして何より、百程度の寡勢で澄水に攻め込んだのか」

湧祥の言葉に、馳は苦笑を漏らし答える。

「私も、理解できませぬな。先の手合わせで貴方は私を殺す事ができたはず。何故に、見逃したのか……まさか、そんなことを聞くためではありませんまい？ 余裕……と捉えてよろしいか」

「無論、否だ。言わずとも分かるだろう。お前たちには、聞きたいことが山ほどあるのだ。元より、殺して終わりにするつもりなどない。特に将と見受けするお前。里に攻め込んだ以上、楽には死ねぬと覚悟しておけよ？」

「あな恐ろしや。ですが、それは無理な相談です」

「なに」

「先の質問に答えましょう。我々が此処にいる理由……“世界”が畏れる鬼神の御業、この眼に焼き付けたいと思った、ただそれだけですよ」

言つて、馳は右手を掲げる。それが合図であるとしても言うように。掲げられた右手に呼応するように膨れ上がる闘気は、先程とは比べ物にならない。それもそのはず。馳の後方に控える玄英たちも、今にも飛びかからんと殺気を放っているのだから。

「来るぞ、構えろ！」

今度こそ、真実の開戦だ。湧祥の号令に、澄水の玄英も細水を構える。

馳が大きく息を吸う。

来る。誰もがそう予感した。

「唾唾ッ！」

鹿喰の血を思わせるには十分な、獣じみた馳の咆哮が開戦の号砲だった。雄叫びと共に地を蹴り走り出す両陣営。先手を取るのは客神派の後方、火器で武装した人間の舞台　ではなかった。

先手をと取ったのは、湧祥だった。距離は最も遠い、迫撃砲に自動小銃、現代兵器を手にした敵後方を睨みつける。ただ睨みつけただけ　しかしその視線の主が澄水湧祥ならば話は違う。

その強力な水衝みで、視線で射抜いた人間の“水”を奪う。奪われた人間は、体内で物理法則を無視して暴れまわる体液、血液に蹂躪され、為す術なく絶命する。

「神は血に、血は神に。成れよ水神、水つ早の刃」

被害はそれだけに止まらず、絶命して只の血袋と化した敵の内部から大量の“水”が流れ出す。成人男性がその身体に内含する水は、血液に限っても4リットルを下らない。それを数十人分、それが全て、湧祥の武器となる。

中空に溢れ出した大量の血は刃と化し、周囲の人間を微塵に切り裂く。澄水家秘奥　チノミハカシ。視線で殺し、流血を刃に変える虐殺の業だ。

開戦より数秒、客神派の軍勢は半分以下に削られた。客神派の間は、一瞬で八十人余りを殺されたことになる。残りの命も秒読み段階で、勝負の趨勢は決したかに思われたが……

「湧祥の技は玄英に効かない？」

驚きを隠せずに拓馬は言う。拓馬は、湧祥の命令で参戦しなかった麗とともに汀の屋敷にいた。先の言葉は「湧祥らは勝てると思うか」という拓馬の問いに対する、麗の答えを鸚鵡返ししたもの。

「じゃあ湧祥は勝てないってのか？」

「いいえ、そうじゃない」

微妙に論点がずれた回答に拓馬は少し焦れる。そもそも「勝てるか否か」を聞いた理由は、湧祥と別れ汀の屋敷に到着するまで、麗が終始、暗い顔を浮かべていたからだ。湧祥の身を案じているのか、彼を護衛できない今の身の上がもどかしいのか。拓馬はそう思ったが、どうやら前者では無いらしい

なお質問を重ねる拓馬に、麗は言い難い表情で言葉を紡ぐ。

「そうは言っていない。けれど、澄水の奥義　敵の血液を水銜みで操る術は、玄英に効きづらいのは事実」

麗曰く、玄英とは“世界”を神と崇め、“世界”と繋がり奇跡を為す者。崇める神の数だけ奇跡があり、他人の血を操るという行為は、人の世界を侵すことに他ならない。常より世界と繋がることを意識し、それを実行できる玄英と、それができない人間とでは、“世界の抵抗力”が段違いなのだという。

「玄英はガードが堅いつてことよ。そう易々と、他人に自分の世界を奪われたりはしない。事実、父のように、十花に選ばれるような玄英には、チノミハカシは通用しない。雑魚には効くし、距離にも左右されるのは知ってるけどね」

でも、と麗は繋げる。

「秘奥が通じない程度で敗れる程、澄水の跡目の座は安くない」

そう、玄英に対しては、体内から血液を引きずり出す技は効果が薄い。だが何も、この地に流れる水は、敵の内だけに存在するわけではない。

馳を先頭に湧祥らに迫る客神派の玄英。その前方に、突如として巨大な紅い壁が出現した。

馳は躲すが、疾走の勢いを殺せず、数名が壁にぶつかる。紅壁に激突した玄英らは、この壁が何でできているか、一瞬で察した。

血液である。地の下から大量の鉄臭い水が溢れ出ているのだ。察すると同時に、危険を感じた玄英は飛び退こうとするが、それを湧祥は許さない。

「この地の下にはな、この地で死んだ幾千、幾万の者の血が散らず乾かず渦巻いているんだよ」

お前たちも仲間入りだと言わんばかりに、紅い壁が形を変え、客神派の玄英を捕える。まるで、蜘蛛の巣に絡め取られた蝶のように、もがけばもがく程に、壁から伸び出た数えきれない糸に巻きつかれ、埋まってゆく。

馳は戦慄する。これが酋帥格第一席 戦狂いの水鬼共を束ねる澄水の鬼子。“歴代最強と謳われた実弟、立清に比肩する”と聞いてはいたが。些か以上に凶悪な力の持ち主であった。

地より滲み、溢れ出した血の奔流は変幻自在にその形を変え、次々に馳の味方を斬り殴り捻り潰し引き裂いていく。百五十を数えた手勢は僅か十数秒で三十以下に。

それでも

「まったく本当に 恐ろしすぎて、笑いが、止まりませんね」

この状況でなおも笑ってみせた馳は、既に湧祥の眼前。血の壁を避け迂回したとはいえ、驚異的な速度での接敵だった。今度は湧祥も棒立ちではない。細水を既に抜刀して脇に構え、地を這うように駆ける馳を万全の態勢で迎え撃つ。

だが、細水と鉤手甲、両者の得物が交差する直前、湧祥の知覚から馳が消失した。

「!？」

突然消え失せた敵に、湧祥は少なからず動揺した。先程馳が見せた驚異的な突進とは、明らかに種類が違う。急激な加速で視界から

消えたように見せかけるでなく、事実、文字通り、消え失せる。超人的な速さを越えた、これは

(鹿喰の、ちから異能か！)

消失した敵の気配を湧祥は全神経を集中させ探る。一瞬の後、それは現れた。

「上か！」

どのような動きをすれば其処に現れることができるのか 湧祥には皆目見当もつかなかったが、馳の鉤手甲がすぐ頭上に迫っていることは、現実として受け止めねばならない。

細水の刃を跳ね上げ、襲い来る爪を払い除ける。返す刀で馳の胸を狙うが、その刃は届かず、馳は再び眼前から消失した。そして気付いた時には、湧祥の背後に立っていた。

「……初見で躲すとは、流石」

痛打を与え損ね、内心歯噛みする湧祥を意に介せず、馳は静かに賞賛の声を送る。

玄英の異能は、普通なら他所者に知られることはない。手の内を知られた者と隠す者、戦いにおいて後者が有利となるのは道理である。ゆえ、水の玄英として名を馳せ、その力、広く知られる一族の当主と、謎多き十一家の分家の者では、異能比べではどちらが勝るか、語るまでもないことだった。

「初見で躲したのは、お互い様だろう」

言うが早いか、湧祥は手にした細水を触手の如く伸ばし、幾条にも分かたれた細水を馳に殺到させる。

だが馳も、驚異的な跳躍で横へ飛び退き、勢いそのまま森の中へ。

互いに想像を上回る能力の使い手。湧祥と馳の対決は、混沌の様相を呈し始めた。

第十六話 凶つ星、鬼の瞳・七

予想以上に、強い。それが馳来虎の、眼前の敵手に対する率直な感想である。

澄水湧祥。病没した実弟、立清に代わり跡目に選ばれた澄水の直系。だが、馳は無論のこと、客神派にとって、この玄英に関する情報は相当に不足していた。客神派が得た澄水湧祥の情報は、立清に瓜二つの風貌のみ。

通常、約誓の領に名を連ねる家の次期当主ともなれば、本来ならばマレビトの社会にその雷名が轟くものである。それこそ、敵対する組織に能力や生い立ちを詳らに知られるほど。自らの顔と異能を知られることは、戦場に立つ玄英にとっては本来避けるべきことではあるが、これは名家を継ぐ者の宿命と言えた。自らの能力の開陳を洩るような当主に、一騎当千の猛者を率いることなどできない。力を曝け出してなお君臨する 歴代の当主たちはそうやって約誓の領を維持してきたし、それに足る実力を持っていた。

だが、澄水湧祥について多くを知る者は、約誓の領にも、客神派にも存在しなかった。つい最近、一年前まで跡目の座には弟である立清が在ったとはいえ、この情報の少なさは異常である。まるで、“はじめから存在していなかった”かのような違和感を覚える。

彼の情報を、少しでも収集し補完すること。それが馳が渥美村に手勢を率いて攻め込んだ理由の一つ。

半刻に満たぬ湧祥との戦闘で、馳が感じた印象が先のそれ。その強さは、予想通りな部分もあったが、誤算も少なからず存在した。

誤算は二つ。

予測の範疇だったのは、血液を操るといふ異能。これは歴代の澄水家当主が持ちえた能力である。

だからこそ、その能力に対して無防備に近い只の人間である要員を後方に配置していたのだが、それが誤算の一つに繋がる。湧祥の水衞みが予想に増して強力であったことだ。そのため、開戦直後に銃火器で武装した後方支援要員を失う羽目になった。

水衞み 渥美村の玄英が持つ、水を支配する力。戦場に渦巻く、全身を内側から撫でられるような悪寒。少しでも気を抜けば、玄英である己とて無事では済まないだろう。そう思わせるだけの威圧感、他者の世界を侵す狂気を眼前の水鬼は有していた。

そして、二つ目の誤算は

強い。一方の湧祥もまた、馳に対して同様の思いを抱懐していた。

ここまでの戦いの運びは予定通り、湧祥が思い描いた通りの展開である。初手で銃火器で武装した人間を全滅させ、続いて地に潜めた大量の血液を操り玄英を殺害する。

さらに、おそらく敵を統率する立場にあり、最も厄介な存在にな

るであろう馳来虎を此方へ誘き寄せる策も成功している。これが馳にとつての二つ目の誤算。湧祥の情報の少なさと実戦経験の少なさを等号で結び、戦上手ではないとどこかで油断していたこと。湧祥と馳、一騎討ちになるのは双方狙い通り。だがその状況になる間に馳は手勢の大半を失った。

湧祥の残る仕事は、馳を叩き伏せ、この戦いの趨勢を決することだが、その最後の一手を馳は容易に打たせない。

地より進む血刀の連撃も、針の如く伸び襲う細水も、間髪入れず繰り出す斬撃は全て躲される。機を見逃さず放った、必殺と信じた一撃ですら、馳は易々と逃れ出る。その驚異的な回避能力には、鹿喰の異能が関与しているはずだが、湧祥はその能力の機巧を見抜けずにはいた。

だが、傷を負わせられないという点では馳も同じ。異能の恩恵により死角から幾度となく湧祥を襲うが、全て細水の剣撃により阻まれている。

(そろそろ)

(仕掛け時か)

互い決定打を与えられぬまま膠着状態に陥っていた戦いは、次の段階へ移ろうとしていた。

水の剣戟を振るい、馳と互角の戦いを繰り広げる湧祥の姿に、浦辺一成は感嘆していた。

湧祥はこの戦いが初陣である。客神派をはじめとした反体制派の討伐などは、当主漣生や幼少より跡目の座にあった立清の役目であった。先日の客神派の刺客との戦闘のような小規模なものを除けば、湧祥の実戦経験はほとんど無いと言っている。

だというのに、この戦いの運びの巧さはどういうことか。

澄水の玄英の基本的な戦法は、細水による近中距離戦である。不得手とするのは遠間からの攻め手。かつては弓兵、近現代ならば砲兵、銃火器である。

湧祥は、此方が苦手とする敵の後方支援要員を真っ先に屠り、さらに地に忍ばせたチノミハカシを操って敵主将と思しき馳を自身の元へ追い込んだ。

そして、馳と鎬を削りながらも、湧祥は味方への援護を忘れてはいない。馳以外の敵玄英に対して血刃を操っての牽制を行っている。そのお陰で、一成らの戦いが数段楽なものとなっている。

「誰も死なせない」と麗に語ったのは決して大言壮語では無かった。

（まったく、正剛のじーさんの教育の賜物かね）

未恐ろしいと苦笑しつつも、この場では頼もしい存在であることは間違いない。

「俺も、十花として負けてられんなあ！」

言っで一成は背負っていた荷を前方の敵に投げつける。

投げたのは四つの四斗樽。突如目の前に現れた障害物に対して、敵の玄英は樽を全て素手で殴り砕く。どうやら身体を硬化、あるいは接触によって物体を破壊する能力のようだ。

投擲武器を失ったと思っただのか、敵は好機とばかりに一成に迫る。だが、澄水が誇る十花の武器が只の樽であるはずがない。

砕かれた樽から漏れ出たのは、只の水。しかしそれこそが、澄水の玄英唯一の武器。

一成が手掌をかざすと、飛び散らんとしていた水はまるで生物のように蠢き巨大な水球を成す。

形成した巨大な水の玉は弾丸と化し、敵の背に激突する。背後から強打を受けた敵は、何が起ったか分からぬまま肺の空気を全て吐き出す。

攻撃の手は緩まず、破壊された残り三つの樽の中からも水球が姿を現す。目にも止まらぬ速さで飛来したそれは、敵の身体を三方から押し潰し、血の花を咲かせる。

敵が絶命したのを見届けて、一成は次の標的を見定める。

高速で飛びまわる水球で、敵を次々に弾き飛ばす一成。

順調に戦いながらも一成には気掛かりが二つあった。一つは開戦

から現在まで、一向に戦う気配を見せず逃げ回る佐志威。戦いをあれほど心待ちにしていたというのに、この体たらくはどうしたことか。

(またあの問題児は……湧祥も湧祥で、あんな輩を何故)

内心不平をぶちまけつつ、一成の思考はもう一つの気掛かりへと向けられていた。先程から地面を走り抜けている、“妙な感覚”。それが二つ目の気掛かりである。

何合目かの剣戟。未だ決定打は与えられず、馳と湧祥は森の中を駆け廻っていた。気配と姿を消して馳が急所を狙えば、湧祥が驚異的な反射と血の壁でそれを防ぐ。湧祥が血刃を振るい周囲を薙ぎ払えば、馳は“必ず”間合いの外に逃げていた。

「随分と、逃げ足が早いな」

「お誉めの言葉と、受け取っておきましょう」

「もう仲間はほとんど死んだぞ。なぜこんな中途半端な侵攻をした。これでは」

「無駄死にだと？」

両者は数メートルの間を開けて対峙する。湧祥も馳も分かっているのだ。現状切った手札では、この均衡は破れないと。味方から

死者を出すわけにはいかない湧祥。一騎討ちが長引くほど味方が死に、不利な状況となる馳。両者、次の攻防で局面を動かすべきであると。

「それ以外の何物でもない。お前たちは、仲間の報復に来たのではないのか」

湧祥の言葉に、本気でそう思っていたのかと、馳は苦笑しながら答えた。

「初めから、彼らに期待などしていませんでしたよ。無論、報復のために今回の侵攻に参加した者もいますがね」

私怨など二の次。目的は別にあると馳は言う。

「目的など、そう易々と喋るわけにもいきませんが。そうですね、例えば」

馳は、自らの足元を指差す。

「土に染み込んでいるにも関わらず、乾かず流体として操ることができる血……これが澄水の秘宝の力であるとか。そういったことを知りたいのですよ」

「……！」

馳の言葉に湧祥は眉根を寄せる。その反応に馳は笑う。

「まあまあ、そんな怖い顔をなさらずとも。私たちは言わば、澄水の秘術を知るためだけに用意された捨て駒、そう気張ることもあり

ますまい。貴方はただ、澄水の惣領たる力を披露してくださいれば良いのです」

「生きて帰るつもりは無いと？」

「元よりそのつもりです。勿論……無為無策で死ぬつもりも、ありませんが。」

何より私自身、知りたいのですよ。貴方に興味がある。一にして万の軍勢、死を振り撒く鬼の瞳、澄水に与えられるその勇名、溢美の言であるか否か」

「そうか」

下げていた両手を前へ。左手を前に、右手を後に。ボクシングでいうオーソドックス。この戦いで初めて、まともな構えをとる馳。

それを受けて、湧祥も左手に細水を形成させる。右手には元から佩いていた水の太刀。左手には地より流れ出る血の刀。二刀を馳に突き付けるように構える。

「そつえば、まだ名乗っていなかったな」

「畜生風情に、名乗る名など無いのでは？」

「里の民を傷つける輩にはな。だがお前は、俺の技を目に収めに来たのだらう」

ならば相応の応接をと、失望はさせぬと、湧祥は告げる。

両者、共に初見の構え。次に繰り出されるのは、互いに必殺の強

手であると悟っている。

「約誓の領酋帥格第一席“水早馬”澄水家当主漣生が一子、澄水湧祥」

「酋帥格第六席“山祇”鹿喰家支派、馳来虎。……いざ」

両者の名乗りに空気が張り詰める。決着の時は近い。

第十七話 凶つ星、鬼の瞳・八

名家に生まれた誉れというのは、それを外から眺める他者が存在して初めて自覚するものなのだろう。それが羨望であれ畏敬であれ嫉妬であれ軽蔑であれ、高き、あるいは低き処から己を評価する者がいて初めて、自身の依って立つモノの位を知る。

約誓の領、玄英十一家“鹿喰”の分家、馳の里にて呱呱の声を上げた来虎は、その誉れを知らずに生きてきた。

玄英としての能力は非常に優秀であったという自覚はある。幼少より能力に目覚めた来虎は、己が力の何たるかを一寸も理解せぬまま戦いに勝利することができたからだ。

玄英とは、現世の不思議を為す者。その力は親から子へ受け継がれることが多い。つまり遺伝する。約誓の領などの名家が昔より変わらず強者として存在するのも道理である。

玄英の異能は、その血に刻まれた本能を呼び覚ますことで発現する。それは誰に教わるでもなく己の力で体得するよりない、というのが通説だ。だが、玄英の家系には程度の差はあれど、体系化された術法というものが存在する。生まれつきの才と、それを生かす技術、戦術は全く別の話だからだ。

しかし来虎は、それら一切を学ばなかった。不勉強でもなければ、矜伐でもない。

一つは、群を抜く戦の才がそれを必要としなかったこと。そしてもう一つは、ただ、理解できなかったこと。人の身に余る強大な力。

それを鍛え磨くことに、何の意味があるのかと。家の誉れのため？
外敵を退けるため？ どれも理由として適当でない気がして、来
虎は懊惱としていた。

鹿喰は古来より山岳神を信仰する狩人の系譜　その傍系たる馳
も例外ではない。その力は卓越した身体能力と狩猟本能。猛獣猛禽
と渡り合うための“野生”が極まったもの。馳来虎は、その一つの
極致に在ったといっても過言ではない。

繰り出される拳撃も飛矢も銃撃も、如何なる攻撃も来虎に届くこ
とはなく。あらゆる攻め手を掻い潜り、意識の外から致命の一撃を
与え、敵を討つ。馳の家にあつて、誰も来虎に触れることすら叶わ
ない。まさに無敵だった。

そんな来虎だからこそ、己の力に疑問を懐けたのかもしれない。
己の身に宿るこの力は、何処から来たのかと。極まった力をさらに
極めて、玄英は何処へ向かおうとしているのか。父や母、約誓の領
が言うように、玄英の力は“八百万の神に与えられたもの”なのか、
あるいは客神派の掲げるように“玄英は神そのもの”だということか。
自分は一体、何者なのだ？

止め処なく溢れる疑問。極まった力ゆえに、馳来虎の精神は、無
数の疑問符に支配されていた。

そんな時、“彼”が現れた。

『この世界に、神などいない』

いつのことだったか、風のように現れ、そう告げた男がいた。

『全てであつて、全てでない。それが世の在るべき姿だ』

男は言った。現世の理は歪んでいると。我々が神の力と崇めるソレ　玄英の為す奇跡の御業も、千々に散つた人の思いの残滓に過ぎないと。

男の言葉が真実であつたのか、来虎には今をもつて分からない。だが、

『君は全力を出したいのだろう、高みを目指したいのだろう？　同じ処をぐるぐるぐると、廻り続けたせいで、君のあり余る力は停滞し閉塞し、それがゆえに澱み始めている。それを解放し、死力を尽くしたその先に、自身の真実が何なのか、見極めることができると考えている』

自身ですら明確に制御できなかった己の感情、それを解きほぐすように伝えてくれた。そして思う。この男について行けば、知ることができないのではないか、己が内に抱える疑問の答えに、と。

『君、私の目になつてはくれないだろうか。私の願いに伝えてくれるならば、君に相応しい戦場を用意しよう』

それは、是非もない要請であつた。

かくて、敗北を知らない狩りの天才は、鬼神坐す戦場へ赴いた。

数十手を超える激しい攻防を経て、両者は森の奥数百メートル、一成ら他の玄英たちの戦いの音が遠く響いてくる程に入り込んでいた。

名乗りの後には、怒涛の攻防が待っていた。先手は湧祥。突き付けた紅と朗徹の日本刀から幾条もの糸が飛び出し馳に巻きつかんとする。障害となった木々は糸に触れるや容易く両断される。

水系水剣細水、“花散” 刀身または糸の表面の水を高速で流動させることで対象を斬り裂く、いわば水製の回転刃、チェーンソーである。

樹木を豆腐のように寸断する紅と無色の細糸。無数の水系に囲まれ、為す術なく刻まれるはずだったが、馳の異能はそれすら回避する。突如として湧祥の意識の外へ消え、糸に囲まれた空間の外へ。

しかし湧祥の攻勢は終わらない。間合いの外へと逃げた馳の総身に、締め上げられるような怖気が走る。周囲の木々が擦れ蠢いたかのように見え、次の瞬間には、

「これは―！」

「総員伏せる！」

湧祥の叫びとともに、周囲の空気を震撼させて、大地のみならず、大樹の幹、葉から、紅い刃が吹き出す。これこそが一成の感じていた地を巡る違和感の正体。湧祥は、馳と鬨ぎ合いつつも足元を流れる血を操り、森中の木々至る所に血刃を忍ばしていた。それを全て、この瞬間に爆発させたのだ。

どこへ躲そうとも逃がさない、森林全体への飽和攻撃。

最初の攻防から今まで、馳は湧祥の攻撃を回避した際、間合いの外へは逃げても、大きく後退したことは無かった。どれも間合いの一步外である。それを見て湧祥は、逃げられる範囲には限界があると踏んだ。いかに驚異的な身体能力と回避能力を持つと、空間転移などという余程現実離れした力を持たない限り、森林全体に振り下ろされるチノミハカシを避けることは不可能だと。

数秒の間、荒れ狂い森中の木々を斬り飛ばす血の御刀。一成らと戦っていた他の客神派の玄英をも巻き込んで、赤黒い鉄の嵐が吹き荒れた。

嵐は通り過ぎる。肩で息をする湧祥。ただでさえ狭い水衝みを限界近くまで引き延ばして、半径数百メートルにチノミハカシによる殺戮空間を作った代償は大きかった。

そして、乾坤一擲の斬撃を以てしても、

「……………見事」

馳は健在だった。嵐の如く吹き荒れた血刃をすり抜け森の外へ開戦の野まで、一瞬の内に後退していた。その距離数百メートル。無論そんな距離まで逃がす程の余裕など、与えたつもりはない。そして此度もまた、間合いの一步外、森の入口だった。

「つくづく解せんな。それほどの力を持ちながら、なぜ客神派の捨て駒なぞをやっているのか」

肩で息をしながら、声も届かぬはずの馳に話しかける湧祥。だが

馳は、涼やかな顔で、次の瞬間には湧祥の目の前に立っていた。左の鉤手甲を、湧祥の胸に突き立てて。

「何故、と仰いましたね。答えは至極単純です。貴方のような強者と戦い、勝利する為ですよ。私の悲願は、その先にある」

「……！」

馳の鉤爪が抉り込まれ、湧祥の顔が苦悶に歪む。異変を察して駆け寄る澄水の玄英を制するように馳は勝利宣言を

「動かないで。貴方がたの惣領殿の命は我が手にあります。さあ、これで詰み……」

告げようとして、

「詰みだと、思ったか！」

湧祥が遮り、叫ぶ。鉤爪が刺さる胸から、湧祥自身の血が迸る。水銜みは水の玄英の技能にして、“水を操るといふ己の世界の拡張領域”である。であるならば、血を操る澄水の玄英が、最も扱いに長ける“水”とは何か。

「自身の、血液……！」

危険を察し馳は鉤爪を抜き飛び下がるうとする。だが湧祥は今度こそ逃がさない。大技による疲弊が演技でない分、馳も深入りした。先の血刃の嵐とは比較にならない速度で、血の剣は湧祥の胸から一直線に馳へ。

これが湧祥の本命の刃。自身の血刃は確かに地に流れる“劣化した”血液よりも遙かに速く正確に操る事ができる。だが馳の異能は未知数、いかな速度でも距離をとれば避けられる危険がある。故にこのカウンター。敵が触れているのなら、もはや逃がさない。必殺を期した一閃であった。

「だが……！」

だが、馳の異能は湧祥の予想の一段上を行っていた。狙い過たず馳の胸を貫くはずの剣は空を切り、馳は飛び退いていた。右脇腹に裂傷を負ったものの、必殺の一撃をほぼ無傷で躲したことに変わりはない。

「警戒しておいて、正解でした。他人の血を操ることが出来る玄英が、自らの血を操れない道理などありませんからね」

脇腹の傷を庇うように左腕を抱えながら馳は告げる。

「形勢逆転には、至らなかつたようですね」

千載一遇の好機を逃したかに見えた湧祥だったが……

「ぐっ!？」

馳の苦悶と共に状況は一変する。心臓の拍動とともに脇腹の裂傷に激痛が走る。傷口を起点として、全身に巡り始める悪寒激痛。真実、馳が生涯初めて感じた苦痛だった。

「何、故」

馳は知らず問う。世に生を受け初めて戦場で傷を負った。その点に関してなら、湧祥の一撃は賞賛に値する。だが、損害という点では取るに足らない傷。かすり傷と言ってもいい。だというのに、これは一体どういうことか。まるで傷口から入った毒が全身に広がっていくような……

「まさか」

馳の予想に湧祥は是と頷く。

「澄水の御業は水の支配する世界。そして、それは己の血でも例外はない。」

一度侵入を許せば、無限に増殖し浸潤する毒の水。今、馳の血の支配権は、湧祥に奪われつつあった。

「俺の血が一滴でも流れ込んだ時点で、俺とお前は水衝みで繋がれた」

それがたとえ僅かな縁であっても、開いた扉の隙間を湧祥は見逃さない。馳の世界を侵すその血は全身に巡り、最早馳の命は湧祥が握っているといっても過言ではない。

「……一つ聞いても、よろしいですか？」

「何だ」

「私の能力に気付いたからこそその、この戦法？」

馳の問いに湧祥はかぶりを振る。

「いいや。だが、未来視、空間転移、時間操作……それら神話の奇跡の類でなければ、おおよその見当はつく」

湧祥の攻撃を常に紙一重で躲していた馳。細水で繰り返す袈裟斬りも、森林全体への飽和攻撃も、例外なく紙一重である。そこに馳の異能の限界があると、湧祥は判じた。

「気配を消して敵の虚を突き、隙を生む力と、攻撃を予測し回避する力。そのどちらも極めたのなら、それは未来視にも匹敵しよう」

それは狩人としての能力を突きつめた一つの究極形。驚異的な危機察知の能力で攻撃を躲し、敵の意識の外へ逃れることで、相手に「まるで馳が空間を超越したかのように」感じさせる。

科学では説明しきれない、常識の埒外の技こそ神の力、玄英の誇りとする者にとっては、この上なく地味な、だが非常に実戦的な力。それが馳来虎の持つ異能の正体。

「だから誘った。お前に刃が届くのは、お前が真実、攻め手に回ったときだけだと思ったから」

そのための演出。限界に近い大技を繰り返し、疲弊したところを襲わせる。演出した敗勢が演技ではない分、馳は深く引き込まれた。

「此方が攻め手を失った時、お前が攻勢をかけるかは、一種賭けではあった。実際お前は“奥の手”を瞬時に察知したわけだしな」

湧祥は結ぶ。

「……はは、っははは」

馳から笑いが零れる。その笑顔は敗北の悔しさや諦観を滲ませたものには見えなかった。

「実に見事。澄水の御業、堪能させていただきました」

笑い続ける馳に、湧祥は訝しんで問う。

「なぜ笑う？」

「失礼。だが笑わずにはおれませんよ。これほどの充足感、生まれ
て初めてだ……」

湧祥に命を握られているにも関わらず、馳の？笑は止まらない。

「つくづく解せないな。矛盾していないか？ 俺の力を探り勝利する
ことが至上の目的なら、たとえば味方が全滅してでも、俺の疲弊を
企図した長期戦を選択することもできたはずだ。なのに何故、勝負
を急いだのか……」

「それは、買いかぶりというものです。いくら私でも、貴方がた全
員を相手に、能力を維持して回避を続けることはできない」

「だとしてもだ。矛盾に変わりはないだろう。生還の望み薄い戦い
に臨んで、俺の力を知ってどうする？ ただの無駄死にはないの
か」

湧祥の言葉に、馳はやはり笑って、答えた。おかしな事など、何
も無いと言わんばかりに。

「矛盾？ 相反する思いを懐くことが、貴方には、それほどまでに不思議ですか」

「私の力では、“神座”に遠く及ばない。それを知ることができただけで、満足ですよ」

それきり、馳来虎は口を閉ざした。

「湧祥が負けることが無いっていうなら、何がそんなに心配なんだよ？」

汀の屋敷では拓馬が麗になおも質問をぶつけていた。

「気持ちにはわかるけどさ、湧祥の力ならどんな相手でも後れを取ることには無いんだろう？ だったら信じて待ってたらいいじゃないか。何がそんなに心配なんだよ。湧祥のこと、まだ俺に隠していることが……いや、俺がまだ知らないことがあるんじゃないのか？」

麗曰く、澄水の玄英の強さの一端は、“手数”の多さにあるという。異能同士の戦闘では己の力の性質、とりわけ力の限界を知られることは致命的だ。手の内を知られるということは、敵に警戒という枷を外させることに他ならない。その点において澄水の玄英は非常に優秀と言えた。

水を操ると言えば一言で済むが、この世は、少なくともこの国は

水で溢れているのだ。澄水の業は大気中の水蒸気や地下水、雨、劇物の液体、果ては人体の水分までもを操り、その用途も刀剣形成、防御盾の展開、人体の内部破壊など多岐に渡る。国内の名だたる玄英を捜してみても、これほど多彩な戦闘手段を持つ者は他に無いと誇らしげに麗は言う。

だが、それでも、

「……首領を無くして、弱体化しつつある客神派の玄英に。湧祥様を討てるのは私も思っていない」

それは、他ならぬ麗自身が口にしたこと。

「でも、湧祥様の命を狙っているのは、あんたが思っている以上に多いのよ。味方でさえ、安心できない」

「おいおい……」

麗の言葉に拓馬は驚きよりも呆れが先立った。

「客神派に、約誓なんとかに、温海派に、身内の澄水にも敵がいるってのか、おかしいだろ。何でアイツはそんなに敵が多いんだよ。湧祥は並の玄英に後れはとらないんだろう？ 最後の直系が身内に狙われる理由がわかんねえよ」

歴代最強と謳われた跡目立清を失い、湧祥までも失ったら、宗家の致命的な弱体化は避けられないのではないか？ 少なくとも、里に数日滞在し、各人の力関係の把握に努めていた拓馬にはそう思えた。里の十花とかいう有力者たちの幾人かも湧祥の能力を買っているフシがあった。

どのような思考を経れば湧祥の命を狙うなどという、滅びへ向かうような選択に至るのか。拓馬には全く理解できなかった。

「そつでしようね……私にも理解できない」

「だったらなんで」

いまいち要領を得ない麗に、拓馬が焦れたとき、

「……あんだ、両面宿讎って知ってる？」

麗は突然、聞き慣れない単語を口にした。

「ラーメン、なんだって？」

「知らないならいいわ」

話が明後日の方向へ飛んだ気がしたが、麗は話を続ける。

「澄水の開祖はね、一つの胸に二つの顔、四つの腕を有する異形だったとされているの。まるで、繋がったまま生まれた双子のようにね」

繋がったまま生まれた双子、その話は拓馬にも聞き覚えがあった。何度かテレビで見た気がする、たしかシャム双生児といったかしかし、何故それが湧祥の命が狙われる話につながるのか。

「そんな伝説があるものだから、昔の澄水では、嫡子として生まれた双子は別に繋がって生まれなかったって、崇められたそつよ。開祖

明蓮の再来だとか、観音様、明王様の化身だーってね」

昔は、と麗は言った。それは、今では違うというニュアンスを含んでいるように拓馬は感じた、そしてそれは、間違いではなかった。

「けれど、跡目争いで双子のどちらかが反乱を起こすことも多かったと、伝承にはある。温海との軋轢もあったのでしょね、いつしか澄水の双子は、災いと呼ぶものとして忌避されるようになった。他家、とりわけ温海には澄水に双子が生まれた事実を知られぬよう、そして万が一知られた時のために、双子の一方を忌み児、凶つ星の子として隠し疎んじて、一生の日陰者として育てることにしたの。秘するのはもちろん、双子の内で劣っているもの……」

「まさか、それじゃあ……」

あの時、湧祥は言った。自分に比べて、弟の立清は優秀であったと。あの言葉が意味していたのは……

「湧祥様と立清様は双子の兄と弟。跡目には選ばれ、日の元を歩いていたのはどちらか、凶つ星に選ばれ、里に虐げられてきたのはどちらか、もう分かっているでしょう?」

湧祥は正道の当主候補ではない　麗の瞳は告げていた。

「里の皆は湧祥様を誉めちぎっているけれど、内心怖れている者もいるはずよ。特に、立清様がお亡くなりになって、湧祥様が跡目になるまで、湧祥様を虐げてきた人たちはね。里を守りたいという湧祥様の思いも、きつと信じてない。いつか必ず、湧祥様に報復されると思うてる」

だから、と麗は告げる。眞実湧祥が頼みとする者など、この里に
おいてすら、数えるほどしか存在しないのだと。

第十八話 凶つ星、鬼の瞳・九

「忌まわしき子供って……だったら、なんでこの村の連中は湧祥を跡目に据えているんだよ？」

「仕方がなかったのよ。湧祥様は澄水にとって、アキレス腱であるとともに、嫡男でもあるのよ。そして立清様亡き後、跡目に就く資格を有していたのは湧祥様だけ。傍系の……それこそ他の十花を当主に据える、なんていう意見が出たほど、紛糾したみたいだけど、それでも最後は漣生様の鶴の一声で決まった」

玄英の武威は、力ある者の濃い血脈によって保たれる。そんな話をたしか授業で聞いたと、今更ながらに拓馬は思い出した。

けれども、麗の口ぶりからすると、有資格者以外から跡目を選ぶことは前代未聞の事態であるようだった。

裏を返せば、そんな話が持ち上がるほど、「忌み児」が跡目になるということが前代未聞だということ……

「それでも、納得していない人は多いはず。澄水派の十花だって、一応は認めている風だけれど、内心何を思っているか分かったものじゃ……」

「もついいよ」

拓馬は、目の前の少女から語られる、主君の不幸な身の上話に辟易し始めていた。湧祥への同情が半分と、倦み疲れが半分……渥美村を訪れてからこっち、胃の痛くなる事態と話ばかりである。つく

づく、とんでもない事に巻き込まれたものだ、溜息を吐かずにはおれない。

そこでふと、拓馬に一つの疑問が浮かぶ。

麗は一体、何を思っこの話を自分に語り聞かせたのか。

元はといえば、湧祥の实力を知ってなお、不安を隠せない麗に対し拓馬がその理由を問うたことが始まりである。麗は質問に答えたにすぎない。

だが、拓馬が気に留めたのは、実際に明かされた内容である。どう考えても、部外者である拓馬に軽々しく話せるものでない。それは麗自身が湧祥出生の事情「温海派に知られぬよう」と、語っていることから明らかであった。

そんな一族の秘密を、ただ領内で事件に巻き込まれただけの一般人に対して、聞かれるままに答えてしまっって良いはずがない。そこには一体、どんな意図があるのだろうか。

「なあ、もう一つ、聞いてもいいか？」

答えの出ない疑問符は言葉となって口から零れる。

「お前が湧祥を心配する理由はわかったよ。それでさ、お前は どうしたいんだよ？」

「それは」

麗は再度問い掛けられ、今度は答えることができずに俯いてしま

う。

その姿に、拓馬は自分の“立場の変化”に気付く。自分はただ、理不尽な事件に巻き込まれ、事件の解決のためだけに、理不尽にも日常から殺し殺されの世界に引きずり込まれた、不運な一般人……

ではない。里の人間の力関係を知らなかったとはいえ、たった一度の会話で絆されたとはいえ、拓馬は自分の意思で、湧祥に協力することを約束した。拓馬は既に、ただの一般人ではないのだ。

麗は拓馬のことを良く思っていない。それが如何なる事情に起因しているかは拓馬には分からない。だがそれでも、麗は一族の秘を拓馬に告げた。拓馬には湧祥の“事情”をどうすることもできない、それにもかかわらずに。

拓馬は思う。麗は拓馬に見返りを求めてこの話を告げたのではなく、只々、聞いてほしかっただけなのでは、と。目の前の少女はただ、里のしがらみと主君の命令の前に、どうすることもできずに途方に暮れているだけなのではないか、と。

人とは隔絶した能力を秘めている玄英、その力の恐ろしさを、拓馬はこの数週間、嫌というほど味わった……味わってしまった。切り刻まれる友人達、あっけなく死んだ作次、瞬く間に散った客神派の刺客。

その光景は恐怖を象って、未だに拓馬の内に在る。それ故に、拓馬は知らず知らずのうちに目を背けていたのかもしれない。

玄英も、強すぎる力を手にしてしまった、人間にすぎないということに。

麗は　　ともすれば自覚すら無いままに　　助けを求めているのではないか。敬愛する当主の側に控え守護できないもどかしさ。それが当主としての命令であるがゆえに、どうしようもない現状を打破する手段を持ちえない己への憤慨。それら全てを押し込めて。

一族の秘密など関係なく、他家とのしがらみなど関係なく、蜘蛛の正体など関係なく……目の前の“小さな女子”が拓馬に願うことは一つではないのか。「湧祥を信じてほしい」と。拓馬を巻き込んだ手前、その一言すら口にできないまま。

そう思い至ってからの、拓馬の行動は早かった。

「なあ」

たどりついた結論は、もしかしたら身勝手な勘違いかもしれない。麗にしてみれば余計な御世話、どこるか取り返しのつかない悪影響を齎すかもしれない。それでも、

「そんなに心配ならよ、やっぱり俺を残して湧祥の処に行った方が」

「ダメ。宗家護剣の汀にとって、主の命令は絶対よ。裏切るなんてできない」

「じゃあさ、俺が湧祥の処に行けばいいんじゃないか」

「え？」

「そうすればお前は俺を守らなきゃならない。俺が湧祥の側にいれば、お前も湧祥の側にいられるじゃないか」

「ちょっと、何を言ってるのよ。そんな屁理屈、通用すると思って……」

だからどうした、人を散々巻き込んでるんだから、それぐらい大目に見ろよ。」

命に背くことを裏切りとまで評した麗。その忠誠心に敬意を表して、拓馬は湧祥を信じることにした。

湧祥を信じる麗を信じ、麗が良かれと為すことが、良い結果を導くと確信して。

「あ〜ッ！ グダグダ鬱陶しいっ！」

拓馬は“焦れた振りをして”麗の腕を掴み、無理矢理に立ち上げらせる。初めて出会った時、傲岸不遜で力強かった少女の身体は、今は軽く弱々しかった。

だからこそ、容赦はしない。ついでに、今まで溜めに溜めた愚痴をぶつけることも忘れない。

「こちとら、お前らの都合で散々振り回されてイツライラしてるんだよ！ 少しはこっちの我儘も聞けよ！」

「そんなこと、言われたって……」

確かにそんな無茶を言われても、麗にはどうしようもない。けれど、先に“無茶なこと”を言いだした彼女には、拓馬に抗う術はない。

「じゃあ行くぞ」

「え？ あ、ちょ」

未だに要領を得ない麗を強引に引つ張り、拓馬は屋敷の外へと駆けだした。

慣れないことをしているという自覚と気恥かしさもあって、拓馬の脚は全力疾走に近かった。

俺に言わせりゃ、^{アイツ}湧祥は鬼だ。

走る拓馬の脳裏に、チンピラ風の男、佐志威の声が響く。会話と呼ぶにはあまりに一方的な忠言ではあったが、不思議なほど心に残っていた。

湧祥が友人達を殺害した蜘蛛であること 可能性としては低い方であると、拓馬は思う。忌み嫌われた存在から、里を統べる権力者の跡継ぎへ。客観的に見て、良き未来が拓けているはずの湧祥が、里の存続を危うくするような行為は犯すまい。威の言うように、湧祥が人の皮を被った鬼でなければ。

「……信じてやるさ。だって約束、したもんよ？」

アドレナリンの過剰分泌か、拓馬の心はいつになく高揚していた。いつ狙われるか分からない状況下で、浸っていい心理状態ではないと自覚しつつも、拓馬はその感情にしばし身を預けていた。湧祥を

信じて良かったと、心の底から思わせてくれる相手に出会ったから。

第十九話 凶つ星、鬼の瞳・十

銃声と怒号の響いていた野に、静寂が帰って来た。

修練の野で澄水の玄英と相對した客神派の一団は、遂に馳来虎を残して全滅した。湧祥が来虎を水衝みで捕縛してから、わずか数分の後のことであった。

「此方としては、ここからが本番なんだが……」

全身に走る激痛で動けない来虎に、湧祥は剣を突き付けることもなく問いを投げかける。それは最早、一切の反撃を許さないという自信の表れ、勝利宣言を意味していた。

「お前自身の目的は分かった。次は、お前の組織の考えを聞かせてもらおうか」

「……それを知って、どうするといつのです」

無力化された現在でも、来虎は不敵な態度を崩さない。

「知れた事。最初に言ったし、貴様らの“伝書鳩”にも伝えたはずだ。俺たちは仲間に害なす存在には」

「容赦しないと？ お優しいことすな。私には、全く理解できない」

「なに……」

「それほどの力を有してなお、御身を虐げた者どもを守ると仰るか」

何故それを知っている、と喉まで出かかった声を湧祥は何とか押し留めた。動揺は、何とか隠し通した、つもりだった。もし剣を眼前の男に突き付けていたなら、揺らいだ剣先で悟られていたかもしれない。

「なぜ、と顔に書いてありますな。大したことではありません。以前、貴方と全く同じ顔をした御仁に、全く同じ事を言われましてね」

「……立清を、知っているのか」

「ええ、顔を合わせたのは一度だけ、ではありませんがね」

湧祥の周りに控えていた玄英たちが、俄かに色めき立つ。何故に天折した里の元跡目と客神派に面識があるのかと騒ぎ出す。

「おめえら、落ちつかねえか！」

「なあんだ、面白くなってきたじゃねえか」

騒ぎ出す部下を一喝する一成。それに対し笑みを隠そうとしない威。

「驚いていただけで何より。それだけで、此処へ来た意味は……」

周囲の喧騒も意に介せず、来虎はなおも言葉を継ぐようとして……

「……」

来虎の表情が、言葉を吐こうとする口が、まるで時を止められたかのように硬直する。

「おい……」「じりゃあ」

来虎を囲む面々に、先程とは別種の動揺が走る。

新手の敵襲、ではない。予期せなんだ来虎の反撃、でもない。

“これ”は所謂、口封じと呼ぶべきものであった。

物言わぬ彫像と化した来虎は、次の瞬間には人としての原型を永遠に失う。

来虎の顔の色は青がかった赤に変色し、黒装束から鮮血が吹き出す。僅かの間、来虎を人の形に留めていた黒装束も、瞬く間に千々に弾け飛び、臓物と血の柱が森中に立つ。

「これは……チノミハカシ紅御刀？」

「おい、湧祥！」

一成が湧祥の肩を掴む。その意図は他の面々にも明白だった。眼前で、来虎を一瞬の内に物言わぬ肉塊と化した業。今この場にそれが可能な玄英は湧祥をおいて他に無い。だが……

「……………」

湧祥は忘我の境地にあった。一成の問い掛けにも反応せず、ただ十数秒前まで馳来虎だった肉塊を見下していた。その様に、周囲の

動揺が加速度的に増そうとして、

「あーあ、なんだこりゃ。つつまんねえなあオイ」

終わりの見えない騒ぎに終止符を打ったのは、佐志威の聞えよがしな呟きだった。両手を頭の後ろで組んだまま、湧祥に声をかける。

「呆けてんじゃねえよ湧祥。敵は全滅、味方はお前以外全員無傷、これにて一件落着、赫々たる勝利ってヤツだ。勝鬨の一つでも上げたらどうなんだい？」

「……そうだな」

言われて、自分がしばし呆然としていたことを自覚した湧祥。隙だらけの醜態を晒し、部下を無駄に動揺させていることを悟り、場を収めようと視線を来虎の亡骸から外そうとして……それは叶わなかった。

「なーんて、な」

「ッ!？」

馬鹿のように軽い調子の威の声とは裏腹に、事態は剣呑な方向へ落下していく。

突如として響く、筒音の如き爆音。音源が自身の足元から発せられたものあと自覚するよりも早く、湧祥は一足飛びにその場を離脱していた。

巻き起った爆風で、馳来虎の亡骸が周辺の木々にぶち撒けられる。

湧祥は、この事態を引き起こした者を睨みつける。

「威、お前、どういっつもりで」

「相変わらずカンだきゃあ一人前だな」

糾弾されたはずの威は、悪怯れもせずケタケタ笑う。自らがこの爆発を引き起こしたことを隠そうともしない。

「だが甘え。普段のお前なら、俺の“汽”を避ける間に、俺に二、三発は叩き込めたはずだぜ」

「何度も言わせるなよ、一体何のつもりだと……」

「それはこっちの台詞だよ、何遍も言わせんな。」

呆けてんなったろうが。弟の名前え聞いただけでこのザマたあな」

威は失望したといわんばかりに両手を上げて呆れてみせた。その間に、また別の位置から轟音が響く。

「ナメた真似してくれるじゃねえか。ゴリア、威」

先のプラスチックが弾けたかのような爆音とは異なる、こちらは地に響く重低音だ。

音の主は浦辺一成。佐志家と比肩する武門、浦辺家の当主である。大音を轟かせたのは、大質量の水の塊。客神派の刺客を殴殺した水球だった。

一成は既に憤怒の相に染まっていた。押し留めた力が爆発寸前であることは誰の目にも明らかであった。

「ちいと腕が立つからと甘い顔してりゃ、つけあがりやがって。温海モンの腐れチンピラが。一度痛い目見ねえと誰がご主人様か分からねえか、ええオイ？」

「ハツ、古参がカビ臭え文句で、つまんねえ横槍入れてんじゃねえよ。てめえとの喧嘩よりも、万倍大事な話があんだよ」

「てんめええ……」

周囲を引つ掻き回す言動を繰り返し、治にあつて乱を好み、無計画に暴れたかと思えば、訳知り顔で人を煙に巻いて笑う。

この男、佐志威のこういうところが困りものだと、湧祥は呆れと怒りを等分に混ぜて思う。

一成の場合はというと、此方も此方で自らの感情を隠そうともしない。怒り一色で今にも威に襲い掛からんとしている。

「一成、もういい」

威の言ではないが、下手に威との間に割り込まれても事態が混乱を極めるのも確かだった。ゆえに湧祥は一成を静める。

「湧祥！ 道場の馴染みだからってコイツを甘やかすとまた……」

「ああ、だから」

湧祥は吼え猛る一成を右手で制し、左手を中空に翳す。

「それなりに“痛い目”には遭ってもらおうか？ そのよく回る口が正直になるくらいまで」

左掌に集まれるは戦場に撒き散らされた紅い水。成れるは剣、澄水派水剣“細水”。敵の亡骸などから吸い出された数十リットルもの血液が、刃渡り三尺余りの日本刀に姿を変える。

「ハ、そうこなくっちゃよ」

獰猛な野獣の笑みをその顔に浮かべた威は、湧祥の成剣に呼応するよつに、自らの“得物”を懐から取り出す。

それは、一見して何の変哲もない、ミネラルウォーターのペットボトルであった。

しかしそれが、佐志威の強力な武器になりうることを湧祥は知っている。

「随分と血迷った真似をしたな威。あの客神派の言に何か思う所があつたか？」

「馬鹿言っちゃいけねえ。思う所があつたのは、どう見てもお前の方だろうがよ」

「……」

「馳とかいったか？ あの黒いヤツ。立清の名前を出したとたん爆

発しやがった。まるで計ったように水衝みでブツ飛ばされたみたいだよなあ？」

「何が言いたい」

威は愉快気に、ペットボトルを器用に指先で回しながら、促されるまま話を続ける。

「簡単な話だろお？ お前と立清が双子だつっつことは、里の外側には知られてねえはずだった。だがヤツは知ってた。てことはだ、あの男が俺たちの知らない、立清の“何か”を知っていたのは間違いないねえ」

「それが俺に刃を向けることと何が……」

「ヤツはお前にとって、何か良くない情報を持っていた。だからお前が口封じしたんじゃないかねえのかつてことさ」

「俺がそんなことをすると思うか？」

「俺にはヤツが、チノミハカシでぶっ飛んだように見えたがなあ？」

「……」

押し黙る湧祥を見、威は我が意を得たりと、笑みをより深くさせ話を続ける。

「なあ、いい加減ゲロって楽になっちまえよ、湧祥。お前が殺つたんだらう？ コイツも……高校生のガキどももさ」

「何だと？」

「だってそうだろ？ この澄水の里には、ガキどもをぶち殺す業も、この黒い奴を殺せる業も、俺の知る限りじゃあ湧祥、お前しか持つてないんだけどなあ？」

「何を言い出すかと思えば……」

くだらない、と湧祥は威の考えを一蹴した。一般人の惨殺事件の犯人と、里に攻め入ったテロリストを“聴取中”に葬った下手人を同列に語っているのだ。破綻以前の問題、推論と呼ぶには幾らなんでも暴論に過ぎる。

「何故いきなり二つの事柄を結び付けるんだ。それに、俺しかいないなら尚更、俺の仕業だと思わせることも容易だと思っけどな」

「そういう、つまんねえ理屈はどうでもいいんだよ。仮にお前じゃなかるうが、このタイミングだぜ？ 少しはおかしいと思って……
……あゝッ、やめだ、やめ！」

面倒臭いと言わんばかりに威は頭を振る。どうやら戦闘態勢に構えたまま喋り続けることに、忍耐がきかなくなつたようだ。

「やっぱ頭脳労働は性に合わねえ。身体動かさねえと、口も回んねえってな」

「結局のところ、お前は俺と戦いたいだけか」

「そつとも言っな」

「この戦狂いめ。そういう無茶は、道場のチャンバラだけにしておけよ」

「そうは言ってもな、お前が言っただけ、湧祥」

「何をだ」

威は胸元から、二つ目のペットボトルを取り出す。一体幾つ忍ばせているのか、湧祥は訝る。先刻の客神派との戦いでは、威がまともにも戦っている姿を湧祥は見していない。初めから、このために得物を用意していたということか。

「俺は確かに聞いたぜ。『下手人は殺す。何者であれ殺す。威は存分に暴れて良い』、だったよなあ？ そりゃつまり」

威が湧祥を賊と見做せば、殺すつもりでかかって良いのだと眼前の、人の形をした獣はそう言い放った。

「とんでもない方向に解釈されたもんだな……」

呆れた風な湧祥は、それでも構えを崩しはしない。むしろ、威の言葉を聞いて更に覇気を漲らせた。

言葉による和解という選択肢は、湧祥の頭からはとうに消え失せていた。

「だが結構だ。俺の初陣にケチをつけやがったこと、後悔させてやるよ」

「ハ、上才等！」

威の咆哮を開戦の号砲に、血生臭い森に熱風が吹き荒れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6835u/>

水の花たゆたい

2012年1月7日23時53分発行